光

第九號

大正十一年三月

□忉利天上にまで……西田天香
□獨白……八田勝三
□托鉢の樣式に就いて……管谷寒眠
□栃木に於ける奉仕日運動……松下吉衞
□講演旅行に御供して……鈴木五郎

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる淨財

□寂……嘻坪
□留守居……相武次郎
□岐阜行……M N 生
□南都遊歩……道徹
□『懺悔の生活』を手にして……岡田次郎外四名
□一燈園だより……京都一燈園

一燈園◇宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は卽ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し、許されて活きん。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に叅はれ、他に障りなき生涯を送らむことを期す。

諸宗の眞髓を禮拜して歸一の大願に叅ぜん。

內外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成二就大圓覺一

別願　將二來世界眞平和一

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し、報恩の爲に行乞せん。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝを得べき、願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ、世諦を成ぜん。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生產業に卽して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し以て在家俗諦を成就せんことを期す。

卽ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せん。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天園、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば則ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは箇中の消息、もとよく言辭の勞し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。

天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙ほ自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規によりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷、紛爭、葛藤を根絕し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては卽ち無相不二。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

忉利天上にまで

西田天香

大坂で托鉢させて貰うて京都へかへる或日のこと。雪は霏々として降りしきる。停車場に着いたのは午後の四時頃であつたとおもふが、すぐに電話をかけたい事があつて驛上の食堂に上つた。めづらしい寒さであるに、こゝはスチームのためにホコ〳〵とぬくい。堅からぬ椅子に腰を卸してコーヒを一抔すゝつたら、何となくたちざうさになつた。

けれども今日は平安中學校へゆかねばならぬ。宗祖の報恩講かで私に話しをせよとたのまれて承諾してある。いつものやうに話しよりは托鉢をとたのんだら舍監の龜川先生が承知して下さつた。定めて一燈園から同人の方々がいつてさせてもらうてゐて下さることだらう。『あゝ寒からうな!』。私もゆく約束であるが!』。フト立つて又電話をかけて見た。『七人さんおこしになつて、今一所懸命に寒いなかを便所のお掃除などまでしていたゞいてゐます。お話しは七時からでよろしいが、さきほどからおまちして居ります。』との事であつた。私は一寸まごついた、けれどもむざうさに、『まだ少し用事がありますから七時頃にはよせてもらひます、同人の方にもよろしく傳へておいて下さい』といひ放して電話をきつた。

電話はきれたが何だか私の思ひはきれぬ。

『あゝ同人の方々御苦勞であるなあ、寒からう、一體自分は此頃だん〳〵變な風になつてゆく。講演をたのまれる、園の生活は講演では濟付かぬ、かうして托鉢させて下さいと頼む、托鉢は一時位でどうするわけにもゆかぬ、つい同人の方々が少くも一日、長ければ先方の望みにまかせて何日でもゆく。あとに自分はその說明にとてお話しをする。ある處で傍聽した人の歸りがけのうわさをきいた。『先生が講演をして居る間に、お弟子達が便所の掃除をするのだなあ』と、自分は恐ろしいやうな、すまぬやうな感じがした。すぐにあとのお話しに『先生が便所の掃除をしてゐるのを弟子が說明してゐるのです』といふては見たが、それでも矢張中心が講演に移つて下坐の事實は注意されぬ。こんなことを心配しながら、餘義なく話しばかりをしてあるく。そのうちに知らず識らずに托鉢がオツクウになる。起ちあがつてやるときは反つて暖かで氣分がよいのに、何だかそれが寒

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

いやうな氣持になる。今も丁度その通りだ、スチーム、やわらかな椅子、それはこゝであそんでゐるのでもない、書かねばならぬ澤山な手紙の返事、それを持ちあるいてゐるのをこゝで片付けるのも一つの大切な仕事である。けれども何だか不純なまけがたしかに自分にあるやうに思はれてならぬ。すまぬ、同人の方に、少しは年もいつたのだからこらへて下さい、全く遊んではゐぬのだから。』

と、思うて見てもまだ何やら心にすまぬ。すまぬなりに貳十通あまりの返事を書いて、ライスカレー一皿とまたコーヒを一杯いたゞいて丁度七時まへに平安中學校にいつたのである。

何くはぬ顔して講演の席に出た。學生諸君の夕のおつとめがある、一しよに合掌して誦和させてもらふ。よいきもちであつた。細川さんに紹介されて横の方で坐はりながら一燈園生活のもやうを語る。眞宗は、南無阿彌陀佛は無碍の一道であり、念佛にまさる益はないとも敎へられる。何の此ほかに半句の駄辯をさしはさまうや。丁度正面に「勿懈爾行」の四字額があつた、前田慧雲師の書かれたものである。爾行の二字には大へんに力を得た。「眞宗は信のみである、一燈園の生活は自力の行でないか」とは屢々忠告された警語であつた。別に自力とも思うてゐぬが、生活の形は毎日その様におもはれても仕方のないやうに動いてゐる。不二門のおひかりは別に信とか行とかを思ふことすらないことがある、大抵はそんな詮義立てをして居らぬ。誰れかが信行は何れが前きかと問うたときに、ある妙好人は『信が前きで行が後とでない』と答へたそうであるが、これは中々味のある答へぶりである。不二の妙諦は語に下だすと危いものである。自力の餘弊があつた爲めといふでもないかしらぬけれども、兎に角信、信と強めて說いた眞宗には、いつのまにか後にしてならぬ無作の行を勝手に不自然に伴はさなかつた弊はないとはいへぬ「勿懈爾行」の行の一字は慧雲師の親切な心の結晶であるまいか。一燈園の生活は此額の四字を無相三昧で修したい、それが無碍の一道たる南無阿彌陀佛三昧と不二でありたい、此三昧が一心でありたい。權利とか義務とかで結縛されてゐる此世の生活狀態から不即不離の關係で飛躍し以て俗諦を成就したい。どうせ私等の歩ませてもらうてゐることであるから、恥かしい事ではあれ共、兎に角每日やらせてもらうてゐます。善いことをしてゐるとも思はねば聖者ぶつてゐるのでもない。學貧學愚の生活です。今日もこゝで托鉢させてもらうてゐます。たゞさせてもらうてゐますだけで落付いてゐるのであります。『そんなことしてゐてどうして家族がやしなへるか』など心配される人もありますが、明日の事を頓と思ひ煩はずに私の家庭は十八年やつてきました。……などゝ、一時半ばかりお話しをさせて貰うて終りに一言次ぎの事を云ひ添へた。

『若しあなたがたに御自身の實際問題で御質問があつたら承

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

らせて下さいませ。批評的態度でなしに、今さしあたつて自分のなやみや問題について、どうすればよいか、どうしてゐるかときいて下さるならば、私も見學の爲めにもなりますし、やつてゐます事をもとにしてお答へさせてもらひませう』

下の一室に大きなテーブルがある。右の方には園の同人が七人ならんでゐられる、お向ひにはお二人の舍監さんがゐられる、その左に學生さんが七八名さんおいでになつた。さすがに引締つた顏をされて、不思私も緊張しました。第一第二ど順番に質問がある、私はそれ〴〵にお答へをする。どの問答にもソツがないが、たしか五番目の方かと思うた一學生さんの話しは殊に私を引締めた。その質問はかうであつた。

『色々行きつまつた問題をもつてゐますが、そのうち今私を一番苦しめますことがあります。昨年の夏の事ですが、國で一人の友人と近い處で泳ぎました。どうしたはづみか溺れかけましたのであせつてあがらうとしますとその友人が、私の首にシッカリだきついて放して呉れませぬ。そんなことをしてゐたら二人ともに溺れるとおもつて放さうとしても中々放さぬ。もうさうなると私も無我夢中になつて友達がひもないきもちです。何うかして放してと無理無體にもぎ放しまして、とうう私だけ浮び出て岸に泳ぎついたのです。友はどうした、浮くか泳ぎ付くかと見渡しても出てきませぬ。流は早し、とつおいつ河原を上へ下へとかけあゐきましたがとうどう姿が見えませぬ一こゝまで話したとき學生さんはハッタと言葉がとぎれました。いつのまにか胸一杯になつて聽いてゐた私が顏をあけて見ますと、彼れはもう話すことは出來ぬのです。こらへ〴〵したため涙が一どにどつと出たかとおもふと男泣きにおしけもなくないてゐるのです。やう〳〵取返してぽつ〳〵泣きながら又あとをはなされました。

私は忙然としました、泣くには餘りにいたすぎる程の恐怖と悲痛でありました。夢中のやうに家へかへり、あとは何にも手につきませぬ。非常な混雜を夢のやうに通り越して學校へきてゐますが、夜はねても夢に、晝は動いてゐても現に友がつきまとひます。「どうしてくれる」といふやうな聲がきこえます。學校で先生や學生の間にある話しなり又勉強修養などでは、どうしてもその友が消えてくれませぬ。こんなことをいつまでも思うてゐたつて仕方がない、「忘れよう忘れてしまはう」とおもふと又一方から「卑怯だ」といふ聲がする。どうするわけにもなりませぬ。今では自分は活きてゐるのが苦しいのです。死んだ友人が仕合せだと思ひます。いつまでかうした痛ましい悲しいことを味はねばならぬかと思うてゐましたが、今日フト便所へゆきましたら、一燈園の同人の方々が、大勢跣足にて此寒い雪の日に便所のお掃除をなされてゐるのです。びつくりして思はず後へ立下り、かけの處で伏しおがみたい氣持になつて起

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

つてゐました。何にうたれたのか自分にも合點がまゐりませなんだが、茲に不思議なことがあります。それは此心持の間は、友の追及が消えてゐたことであります。私は不思議といふより外はないと思ひます。それから色々考へさゝれますにはこれは、一燈園生活をすることによつて救はれるのであるかも知れぬとおもひました。もしさうであつたら私はさうなりたいのです。先生どうお考へ下されます？。』

やつと、泣き落つべき胸をひきしめ〳〵こゝまで話し終つたこの悲痛の極である話しを、園の同人學生舍監の方々一人として涙ぐまずには聽けませなんだ。私は平頃若い人の問題で且實際の告白でかやうな悲痛な(事柄は複雑でなうて)ものを聽いたことはない。どう答へてなぐさめてよいか。いなどう答へ得て私自からが落付けるか。この人の問題は私の問題である。私はどうすれば溺れし友を成佛さすことが出來るか。またその友に追はれるこの人をして、此實際の苦しみから脫却せしむる事が出來るか。私はとつおいつ考へたが、ついに深い禱りにゆかねばならぬ事になつた。一同は水をうつたやうになつて、伏し眼になつて微動だもされぬ。そうして私の唇は容易にあく事が出來ぬのです。

すると私は又別に一つの大きな苦痛を覺え出した。それはこの學生さんの物語りのうちにある『托鉢されてゐる處を見たときだけは、溺れし友が消えてくれた』との事から起る私の驚畏である。一つはかくも托鉢(かうして一所懸命に下坐してやつてくれられし)が力あるものであり、祈りとなつて居るものかとの驚きをこめた尊さの感じと、一つはこの尊き下坐の托鉢をなまけて先刻驛上の食堂で、手紙をかきながらであつたとしても、スチームにあたゝまりながら休んで七時を待つた私の罪を責める思ひである。此學生が同人に知れぬやうにかけて拜んでゐた時分は、私がカレーとコーヒをすゝつてゐた頃かも知れぬと思ふと、更らになさけなくなつてくる。一面からいへば同人諸君にすまぬともいへるが、一面からはなぜ此光榮な事に漏れたかとも思へて口惜しい氣持がする。下坐の托鉢をせし同人こそ、この學生さんに答へる資格はあるが、私はない。しかも今何とか答へて通らねばならぬ。私は二重の苦しみである。けれどもやう〳〵私の過去の貧弱な經驗のなかゝら慰め得る事實と先輩のおなじ事とをよせあつめて、祈りながらきつぱりいつた。

『どうか、その溺れし友の爲めに、あなたも死んであげて下さい。もし一燈園の生活で死んだがよいとおもはれたら園にきて下さい、一しよに下坐して死にませう。私はこの言葉を手輕くあなたにいふのでない。眞劍でありおひかりの力にすがつていひます。そうして過去の經驗を一つと先輩の尊い話しを一つさせてもらひます。

今から十七八年前のこと、日露戰爭は旅順の陷落するか否かによつて運命の決せらるゝ時。乃木大將は肉彈を涙を呑

んで打ちつゞけました。兵士も士官もこの肉彈としてあとから〳〵送られねばならぬとき。士官であつた私の鄕里の一友人が召集されて出發するのです。立派な家の相續人でもあるので、鄕里のものは總出といふほどに停車場へ見送つた。手に旗をふりたてゝをれども誰れの胸にも「肉彈々々」との思ひはある。停車場で列車の出ようとするときに一同車中の士官を見つめながら「萬歳！、萬歳！、萬歳……」と狂氣のやうにさけんでゐる。私は他の一友人―Sと共に列車のうちに立つてゐた。士官は擧手して澤山な親類とともに挨拶を返してゐる。眞劍な且は悲痛な光景であるけれ共、そこに何ともいへぬ物足らぬ感じがする。Sは私にいうた。「Nはあの萬歳で滿足してゐるだらうか？」と。私は答へた「とても滿足は出來ないね」。「どうした言葉と思ひで見送ればよいだらう。」「自分もそれに困つてゐるのだ。」「何というても肉彈とあまりに運命がきまつたゐるだけにね」。「そうだね」。

SはNの最も親しき友人であるだけたまらぬのである。私は一寸年もちがふ　併し此問題についての親しさは同じである。當時Nと私はトルストイの研究をしてゐた　かうして一段深く問題になる。列車は出て米原についた。一度下車して待合の茶店に休んだときには、Sも私も無言であつた。共に深い考へをつゞけたのであつた。再び列車に乘つた時、私は士官のNの手を握つて「どうか立派に死んでくれたまへ、自分も此の問題のために死ぬ覺悟をしてそれで君を送別したい。自分は世界に戰爭のなくなるやうな祈りと生活を送り出すために死ぬ、それを誓ふ。かうして君も死んでくれ。」といひ終つて又強く掌を握つた。Nは無言でフンフンと輕く首を下げてゐた。

三ケ月もたつたあとか、突然聞いたうれしいたよりはこの決死の士官のN氏が、大阪衞戍病院へ歸つたとの知らせであつた。早速病院にいつて見舞うたら、運强いNはあまり重からぬ負傷で後送されたのである。Nに見舞をいうたあと私はきいた。「出發のときは萬歳！　をどう感じたね」「何だか落付かぬものだつた、くすぐつたい感じした」「自分も夢中であつたやうだが、君も死んでくれというたときは」「あれはこたへた。たしかに送られがひがあるとおもうた。あれで少しは落付いて死ねるやうな氣がしたやうだ」と。彼N氏が果してそうであつたかどうかは自分はその時知らなんだが、自分はその時そう決心して落付いた。自分は萬歳と醉ひ心地でいうたり又旗ふる位では、此友人を死に送ることは出來ぬ。自分の良心はそんな事では落付かず、これではきつと夢　も現つにも氣が殘る。おそいか早いかのちがひこそあれ、自分も決死と覺悟して「死んでくれ」というたればこそ、その時の自分も落付いた。たとへ彼が死んだとて決して夢に追うてはこぬ。よしや追うてきたとて何ともない。『よかつたね、草葉のかげからおれの軍さぶりを見て

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ゐてくれ、今にゆくぞ。』というてやる。
これは自分が死ぬ覺悟、死んで新生活を平和の爲めにさゝげさせてもらうてゐるからである。移して以て今のあなたの問題にあてはめる事が出來る。あなたが我の爲めに存在せず、佛にさゝげ此一生を一切の爲めに出すならば友は決してあなたを追はぬ。一燈園同人の下坐の托鉢をおがまれたとき、友人の影が消えたのも道理のない事ではない。
もう一つの先輩のお話しは尊いことで、自分等の及びたえた事である。曹洞宗の開山の良介といふ人の事です。洞山良介といへば禪門の大巨匠で人天眼目である。母親に許されぬのを無理に家出をして幾年の後に立派に修業をすませて洞山といふ處に道場を構へ澤山な大衆を督勵されてゐたのである。母親はどうしても今生でも一度子にあひたいと、一心に念願して乞食になつてさがしまわり、とうどう洞山にゐるといふことを聞いて尋ねついたのである。處が良介は深い祈りの爲めでもあつたか、一室に入定して、出て會はぬ。あまりのことに母親は泣き死なれたとの事である。これは年も老い、あまりに疲れ、またあまりに喜んだりした爲めで氣がうすくなつてゐたのに、折あしく良介が深般若から出てこなかつたので失望した爲めでもあらう。處が翌朝良介は、母親の首に懸けた頭陀袋の中の米を大衆の粥の中に入れてたべさせ、高坐に昇つて説教された。「昨日母が尋

併し母は昨夜自分の枕頭にあらはれたもうて、「一度は無慈悲とうらんだがおかげで今は忉利天に生れたから喜んでくれ、一寸お禮にきた」とあつたというて一段聲をたかめて「爾等會すや否や」皆さんわかつたかどうかとむすばれたそうである。何と尊い話ではありませぬか。うらみ死したはずである母親が、忉利天上に生れ、禮を云ひにくるといふ道理がたしかにある。自分はかうした事を成程と了解することが出來るかと又移してあなたにすゝめる。あなたも立派な前途ある人である。一つ此逆緣を光化して、まづ友人の魂を消し次ぎに大勇猛心を振つて、友人を忉利天上の人となし、あなたに禮を云ひにくるやうにさせて下さい。一燈園にはその準備があるべきです。もし入園しようとおもはれたら、喜んで共に死にませう。あなたのお話しの爲めに不思ひきしめられたことをお禮を申します。」
と答へてホツト一息した。一座の人はまだ水を打つたやうに靜かであつた。雪はやうやく降りやんだ。一同に別れて歸りがけ、同人の方々と共に、うどんやによつてあたゝかいものに腹をこしらへ、今日の自分の懈怠を詫び、ありがたい一日を謝し自分は衣の棚の托鉢先きへ、一同は鹿ケ谷の園にかへられた。時は十一時すぎ、寒い夜を遠い東山の麓迄かへられる同人を、心のうちでふしおがみ、法喜にも此話をきかせておひかりをたゝへてねた事である。到る處に師匠はある何時でも教岸

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

獨白

八田勝三

雜誌が載せる、新聞が紹介する、講演が行はれる、燎原の火のやうに私達の生活が人心に傳はつて行つた。毀譽褒貶は風評中に湧き上る。併し之れは私達の祈りに何の障りもない、だが世間が漸く天香樣を偶像視しようとして居るのは強ろしい、不二の光明を見ないで人を批評されるのは苦しい。私達は勿論取るに足らない平凡な人間だ、この生活が深まるにつけて益々はつきりと自己の少さきを知り、殆んど絶望に近い淋しさを覺える、さうした中に切めて私達のやうな者でも何かお役に立てばと祈る所に、嚴然たる一白道が鮮やかに見える、久遠の生命が寂光土に輝いて居るのが分る。たとへ一瞬でも本當に生きようとするは、眇たる一布衣の努力であつても尊といものぢやなからうか。私達は唯それを求めて、今を永遠に生きようとするのだ。

此頃道を掃いて居る時に、思はず大地に跪いて感謝し度いやうな敬虔な心持に涙ぐんだ事がある。人間は居城の位置の知れないやうにとて無理から曲つた道を作らへた。近道だと稱して勝手な所に道をつけて了ふ。泥濘になつて原因を考へないで道に罵聲を浴せかける。砂塵がたつと言つて怒鳴りつける。それでも道は底知れぬ愛をもつて、默々と一切を載せてくれる。自分外の責任をも忍受して飽くまで下座を行じて居る。殺人鬼の足跡すら憫れみ深く受け容れてくれる。私達の祈りも玆まで深められなくちやならない。

世界中の人々に一度に話しかけ度い心持が時々湧き上る。そしてその不可能なるを想ふ時、大きな寂しさに襲はれて泪ぐみ乍ら祈る。だが總てが矛盾に惱んでゐる、總てが何かを求めて居る。見て居るのは餘りに苦しい。私は思はず壁に向つて獨白する。「唯卿等が自ら耕せば好いのだ。寂光土は胸奥に埋つて居る。そこに久遠の生命、靜かに眠つて居る」と。

物質的に貧しい人達計りが惱んで居るのではない。金殿玉樓も火宅の裡にある。私達の祈りは全體の調和にあつて、燭を升の下に置かず燭臺に置き度いのである。不二の光明は總

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

てを照らすを必要とする。斯くて與へられたる機會に於て、一様に祈らせて頂きたいと願ふわけである。

内に居れば何の差異も感じないで、二階と三階の窓外に佇つて硝子を拭けば心持の違ふ事を、如何しても否定出來ない「死も自然現象なり」と思つても、危險(?)なる位置にたてば慘めな自分を次の瞬間に見せつけられる。親友の死に遇へば人間苦を痛感する。後天的に肉體の死を怖れるやうに意識させられたのが何時までも不知不識の間に、働いて居るのだらうか？眞實に摑んで居ないのを思へば、一寸寂しい氣がする。

正月の寂しさを知る。人々が生活を離れて、因襲的に享樂的氣分に耽ける時、二元の世界が餘りに強く印象される。自己偏端に一瞬たりとも妥協して生きるのは、決して人生に忠實な者ぢやない。生活に徹せよ、遊戲三昧の境地は自ら見えるであらう。

年始に歸郷した弟が京都に天香様をお訪ねしたら、その託けに唯祈つて居りますとお傳へ下さいとの事であつた。究極はそれに盡きる。言葉ぢや解決出來ない。話ぢや外形ぢや摑めない。願ひとしては眞劍な同人が切めて十人東京に欲しい。「少なく共私達丈けには、最後の血一滴になつても歩む可き道だと信じて奉仕させて頂いて居ります」斯う無言の托鉢の裡

に話しかけ度い。後は一切光まかせ機縁は何時か熟するだらう。

（東京一燈園に御用が御座いますれば左記宛にお書き下さいまし）

東京市下谷區上野櫻木町四五鈴木様内一燈園當番

凡人の嘆き

まさる

△核心を摑まず去ぬる友を祈る東京驛の夜の寂しさ

△きりぎしの上ゆ呼べども谷底はこだまのみなるわが嘆きかな

△貧民の子の足洗ひ喜べる卑しさにふと泪ぐみたり

△永しへの十字架なりや神と人わが胸内に佩れ戰ふ

△言葉のみ美しき世にならされし性失せやらす年明けにけり

托鉢の樣式に就て

菅谷寒眠

松下兄

あはたゞしい御別れをしてから、いつもの通り四里の路をていくてくとこの南押原村迄歸つて參りました。栃木を出ましたのが、夕暮近い頃でございましたので、宅に着きました際はもうとつぷり陽も暮れ込んで終ひました。兄も鹿沼へ御出かけの節御氣附きでしたらうが、あの金崎の宿場を離れると間も無く、廣々とした河原がございます。そして宏壯なピーア一式の釣り橋がかけられてゐるのを御承知でせう。小倉川の名になぞらへました小倉橋です。私は、いつも栃木よりの歸り路の約束の樣にこの日も、小倉橋の欄干に凭れまして落ちてゆく夕陽を葬うて參りました。私には、荒寥として水枯々になつた河原にかけ渡された行人のまれな橋上に佇んで、殘雪に淡い夕陽の反射をうけて、寒さうな北の空に浮き出してゐる、男體、太郎、大眞名子、小眞名子、さては高原、雞頂山なぞの山脈を眺め入ることが、この歸り路の人知れぬ悦びなのであります。あの山の樣に澄み入りたい。あの夕陽に浮き出された頂の松の樣に、ありのまゝはつきりと、ありたい。いつも願ふことをこの日も繰り返しお願ひして、暫く、すそを冷たい河風にさらはれ乍ら立ちつくしてゐました。

松下兄。

この手紙を書いてゐますと、寒さうな鈴の音を宵闇の中に顫はせ乍ら寒詣での人が、私の家の前を通り過ぎました。かう書いてゆくペン先のインクもぢりぢり凍らうとする寒い夜です。それに、耳を澄ますと樹の頂にも風も渡る氣配です。たとへ、その人達の主觀に濁つた影がさしてゐたにしろ私は今更乍ら、身をひきしめられる樣な氣になります。精進！幾度同じ言葉をはんぷくし、そして空しい痕跡の續くことでせう。

松下兄。

毎度申し上げる事ですが、一燈園の實生活に無經驗な私が一燈園生活に對して、批判がましい言葉を挿し夾むと言ふことは、パリサイ人の態を學ぶ樣にも思はれて、なにやら氣もさすことですが、又そのために長年一燈園生活に曳きずられてゐるとも見られる私の生活に、その點をお尋ねすることに依つて豁然として飛躍の道が開かれて、兄達の仰がれてゐる、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光をこの醜弱下品の身にまともにおうけすることが出來る様になれば歡喜の極みでございます。お導き下さい。以下現在の一燈園生活に對して抱く私の疑念を、野人の野語そのまゝに、ざつくばらんに申し上げます。

一、最も手近な具體的例證として光雜誌去歲の十二月號に採ります。

南部托鉢の題下にものされた青木義則氏の「餘りにあざやかな光を拜みました」と申されるその光禮讃に到る過程を通して、一燈園の實社會（一燈園と實社會と區別することの妥當なりや否やの論議はいまは別として）に對して、はたらきかゝる形式としての托鉢に就て、少しく申し述べさせて頂きます。「南部托鉢」に依りますと、青木氏達は、一女學校に托鉢せられた樣でございます。織る樣に往き來する生徒達の間に立つて働かれたと誌されてゐます。そして光の命ずるまゝに托鉢され、而して、生徒達も「勿體ない。勿體ない。」と思ひ、中には涙を浮べられた生徒もゐたとのことです。それから學校の托鉢の終つた後―青木氏は、これ迄は極々當り前の過程と申されてゐます―長距離電話で托鉢のお先ぶれを天理教にされ云々……餘り長くなる樣ですから青木氏の敍述は拔きにして、私の疑ひを、端的に申し上げます。

女學校に托鉢される。私はこの事に就ても或る危惧の念を抱きます。危惧とは何か。女學校に通學する女生徒、それは最も感受性の鋭敏であり、ともすれば感傷的に物象に觸れる、碎けて言へば、髪の毛一本拔けたと言つては泣き、笹の葉一枚動いたと言つては笑ふとされる所謂處女時代の女性達です。而して最も純眞な愛の所有者であります。この敏感な感傷的な純眞の女達に包圍され其の注視の中で托鉢する、その托鉢に依つて光の反射を見たとするのは、而して所謂法悅を體驗せられたと言ふのは、餘りに安易な謂はゞイージーゴーイングな氣持ではないでせうか。それに男は、女の中では、得て内的にも外的にも、注視されるを喜び、且つ動き易い性癖を持つてゐますから。つまり女學校と言ふ所は、この社會で最も托鉢し易く且又最も托鉢の反射の手早く現出され得る所であると思ひます。この故に、未だ十分に到らぬ者の修業所としてはどうかと思ふのです。思はず女學校の事で長くなりました。然しこの事は餘り托鉢の根本問題としては、注意すべく値しません。それから、天理教に參られたとの事です。電話でおさきぶれをして、そしてすまない、すまないと申し乍ら、絹の蒲團を出されたり、大廣間に通されたりしたそうです。尤も幾時間も停車場へ托鉢の御出迎ひに提灯さげた人がふたり迄も出向いてゐた程ですから、さてこそとうなづかれます。

こゝで私は托鉢の形式にはたと行きあたります。一言で申しますと、天香さんが「懺悔の生活」を世に顯はされ、一燈園生活のかくもヂヤーナリストのペンの先に賑はされぬ前ならば、托鉢生活の意志も徹底せられるでせうが、かく一燈園生

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

活が世間的に喧傳せられてゐる今日、天香さんを中心とせる一燈園生活を背中にし—いや自分では背にせんと言つても、世間の人は、一燈園の後光をその人に迄及ぼしますから同じ譯と思ひます—表玄關から托鉢に乘り込む形式に餘儀なくせられると言ふことは、托鉢樣式の矛盾ではないでせうか。形骸に驅使せられてゐる人間も、案外、自分に利害關係の薄い事柄に就てだけは、宗教的事象には、しんみようなものです。

光に呼ばれて！餘りに光の呼ぶ先々の、ブルジョア氣分の旺溢してゐることよ。お祭り氣分の見えすく事よ。積年の貧と社會的壓迫に窮迫せる白屋の皺枯れた老婆のかたはらからは、光の手はまねがぬものだらうか。誤れる社會經濟組織の爲に蹂躙せられたる第四階級の陋屋からは、光の聲は呼んでゐないだらうか。

講演會、それもいゝだらう。勿體ない勿體ない、そして絹蒲團にお迎ひ提燈？念佛申して泥棒するのとどれだけの違ひがあるか。咄、思想的、宗教的手淫に終らぬか。巷に祈るのを止めたクリストがうけがはれる。

餘り長くなる故これでこの手紙は失禮して頓首と結ぶことに致します。然し一燈園生活に對して私の抱懷する疑念はまだ〲なかなかと澤にございます、然し結局、根源的光に對する質疑ではなくして一燈園として株式化せられてからの問題です。その意味に於て、兄の態度に光の純新なる現れの曙光を仰ぐ様な氣もちがして、かくらうるさく、御尋ねし御導きを願ふ次第です。　頓首

——一九一一二、一、二〇、——

（上略）こちらで知人の家に托鉢してゐます間に、歸りの旅費が少し不足になりましたので、家に金を請求いたしました。金は來ました。しかし、明に淨財ではありませんでした。却つて母の心を躓かせるもの、一燈園だつて金は必要なんだと思はせるものであることを知りましたので、持つてゐた金と送つてきた金とを全部送り返しました。托鉢是一燈園。（光に許されるまではこちらで托鉢させていたゞきたく思ひます。（下略）

（古川實兄より）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

栃木に於ける奉仕日運動

松下吉衛

天香師

去年の秋東國に御巡戰の折、栃木、鹿沼、足利、東京と拾日あまりも親しく御供させて頂き、鹿沼の日本麻糸で屑糸の整理を手傳はして貰ひながら、又、足利の小學校、中森樣宅東京の中桐師宅勝井樣宅小此木樣宅などで、引つ切りなしの御接客のあひま〳〵に勞資問題對策、宣光社と光との關係、宣光社の種々相、一燈園運動の組織化、いのりのかたち等について、種々懇篤な御導きに預りまして、鈍根劣機の身も日々奉仕にあやまちが何程かづゝ少なくなつて行つてるやうに感ぜられます。今更ならねど、師の御恩、ふかく御禮申上げます。

十一月一日、御茶の水の女高師同窓會に、御講演あそばさるゝ御豫定と聞きながら、栃木の方もさう長くは留守に出來にくい事情がありましたので、「東京一燈園の具體化」の御相談を未了のまゝ、來春早々又いらしつて下さるといふ御言葉を樂みに、すゝまぬお別れを申上げたのは、十月二十八九日頃かと覺えてをります。新年になり匆々今日か明日かとお消息を心待ちに待つてをりましたが、御多用と見えて、今に御東上の御消息に接することが叶ひません。

先達、光の編輯に、中桐師宅へ御邪魔に上つた折京都一燈園此頃の模樣を、あらまし、同師から聞かせて頂いたので、近々に拜眉はとても叶はぬやう存ぜられますので、其後に於けるこちらの狀況を御耳に入れ、何くれと御批正の勞をとられたう存じあげます。

栃木で私が「宣光社」的態度をとらせて貰つてからもう足掛三年になります。それが第一宣光社でない悲しさに、光は消され通し、修業も相當させて貰ひましたが、隨分墮落もいたしました。可なり懇意の仲でも「商賣」にかけてはあくどく厘毛まで爭つて平氣でゐますし、町會は町會でまるで擊劍のかまへそのまゝの氣分です。議事法とか云ふものがありまして少しでもすきがありますと、すぐ打ち込まれます。議員であつて見れば、贊否いづれかに加はらなければならず、どう考へても町の爲めにならぬこと、はつきり濫費とわかつてゐる場合など、言ふだけ言はねば、贖職の責を免かれませんし

言へば必ず爭ひになるといふ始末です。そのイヤな氣分たらありません「道理」がトントロをきないのですから。御想像なすつても見て下さい。ブルジョア氣分の漲つた、事勿れ主義の片田舍の小都會——それは師が度々見えられても法語一つ聽かうともしない程、信仰心の冷めた沙漠のやうな土地——そこの町會に席をけがして、あゝのかうのと言ひ爭はねばならぬみぢめさを。今の場合、町會に臨席しますことは、私にとつて一種の努力にさへ値します。立憲政體自治制度の實際は、かうしたものかと考へますと、反議會主義者の提唱に耳を傾けないわけには行かない氣持がいたします。

「商取引」の氣持惡さつたら又格別です。かねてかうあらうとは覺悟の前でしたけれど、自身したしく責任者の地位に立つて見ますと、骨身にしみてイヤな思ひをさせられます。賣掛は色々な苦情をつけられ勝ちで中々集金が思ふに任せませんのに、よくもこんなことが言うてこられたものと思はれることを平氣で要求して來ます。こつちを立てようとすれば五分々々までの勝負は打たねばならず、それには可なりな努力と懸引とを要します。戰爭氣分でなくては一日でもやつて居られません。特定の誰彼が惡いといふのでは勿論ありませんが、かうまでにしなければ立たない、人間の生活は禍でなければなりません。組織惡は確かに組織惡だと考へられます。中世なら知らないこと、今の社會的大規模生産の時代にあつては、餘程種類を選ばないと宣光社の經營は中々の難事らしいです

かくて貧弱ながら私の經濟的宣光社試營の經驗は、人と財と二つながら淨まつてゐる「第一宣光社」でない限り、同人としては、少なくとも今の場合、あまり積極的に働きかくべきでないと共に、生活資料の象徴たる金錢に對する執着が持てる者は持てるながらに持たない者は持たないながらに、くどく強烈であつて、とても、なみ一樣のいのりでは、私ごとき不信のものには到底刄もたゝない事實を敎へてゐるやうです。

で、私は、いつそ凡てを擲つて無所有の生活に歸ることに可なり心を動かしましたが、此頃栃木の青年者の間に一種りヴアイヴアルとでも名づく可き、お祈り添へせずにはをれぬ雰圍氣が醸されつゝあるので、相許してゐる友がその運動の中心人物であるのを幸ひ、今は共方へ殆んど沒頭的に奉仕させて貰うてをります。家へ歸りますのが夜中の一時二時になることも珍らしくありません。富田兄にも敎職の餘暇献身的助力を乞うてゐますこと勿論です。

かうして生れ出ましたのが、「奉仕日運動」(團體的托鉢)を標榜する「栃木青年義勇奉仕隊」であります。今、隊規のあらましを述べますなら、

目的　犠牲的精神の發揮
　　　奉仕的生活の體驗

組織　隊員　栃木青年團員、栃木青年團改善研究會員及び

一般奉仕者
但し入隊證をいれること

参謀　隊員の公選十二名。任期一年。
當番参謀　參謀の互選一名。任期半年。任務　常時に於ける奉仕隊の統略
會計　参謀會の推薦一名、任期一年。
文書　参謀會の推薦二名。任期一年。

出動編成　五人を伍とし伍長を置く。三伍を班とし班長を置く。隊長之を統ぶ。
伍長は伍の選擧、班長は班の選擧、隊長は全隊員の公選。
任期　隊長一年、班長伍長半年。

會議　總會（通常會一月七月年二回、臨時會隨時）
参謀會（例會毎月一日午後七時一回、臨時會隨時）
参謀會の議決事項は之を隊員に通告し直ちに實行すること
隊員は隨意に参謀會に出席し参謀同樣議事に參與し得ること

事業　奉仕日運動（毎月十回）　標語運動
非常救護
區劃委員制設置　共濟組合運動
自警組合運動　簡易圖書館
靈的社會事業一般

清規　虔んで生きよ（敬心）爭ふな（平心）
雄々しく進め（雄心）

服務心得　出動の場合、隊員はすべて隊長の司令に絶對服從のこと　但し参謀といへども隊長の權限を侵さぬこと
我を立て合はぬこと
サボラないこと
人のやりたがらぬ必要なことを安んじてやること

入隊證書式

入　隊　證

原籍	
現住所	
姓名	
職業	
生年月日	
入隊年月日	

入隊の上は左記條項神かけて嚴守いたします。
一神佛を敬し人類を愛し祖國に忠なること
一身を挺して他の難に赴くこと
一我の爲めに爭はないこと
一むさぼらないこと
一衞生　勞働、研學、修業、一日もなほざりにしないこと

栃木青年義勇奉仕隊御中

産まれてまだ數十日にしかならず、隊員も六十名ほどしか出來て居りませず、從つて社會的發動としては、郡、町主催の生活改善展覽會統計展覽會への出品並に說明役、初市日、交通整理並に民衆麥湯接待、消防救護、簡易圖書館開設等に過ぎませんが幹部の人達の訓練も日一日と本物になりつゝありますから、近くモツト〳〵澄み切つた底力ある態度に出られることゝ信じてゐます。

これまでほどのものでも、町では相當問題にして居る樣子で、あゝのかうのと批評を耳にいたします。善意ならざる下馬評には、たゞ「默」の一字を以て答に代へて居ますが「犧牲奉仕の精神には賛成だが家の經濟と兩立しないので困る。」との無理からぬ態慨を親御から聞かされる時私は心で拜むより術を知りません。かうしたお家へは、事情の許す限り托鉢させて頂かうと思つてゐますが、從來の宣光社的關係の整理事務がある上に、協調會から御依賴を受けた調べ物などもあつたりして、暇がないものですから思ふにまかせないでゐます。

奉仕の體驗には何物か純な青年者の心を力强く惹きつけるものがあると見えまして、親御の喜ばれないのもかまはず、かひ〴〵しい奉仕ぶりを見せてくれられますので、實にハラハうさせられてゐます。早晩、隊としても一問題あらうかとも察せられますが、この「奉仕運動」が澄みに澄んで、彼の印度に行はれてゐると聞いてをります聖雄ガンディによつて率ゐられる斷食祈禱のそれと比肩し得る底のものともならば、幾分かは神の領域を擴める上に貢獻することが叶はうかと考へてをります。

しかし、かうまで、のす前に、是非に師の御來柄を煩はして、この運動が果して正道を踏み外してをらぬかどうか、仔細に檢討して頂かないでは、青年者の一生涯に支配的影響を及ぼすことがらでありますので、どうとなく安んじない氣持がいたされます。

無所有生活の權威と徹底味は今更らしく私がこゝに說くべきではありますまい。たゞそれは、「行き易くして人なし」と古聖の嘆ぜられた通り、萬人には望み難い或るすごさを具へてをります。僅かの選ばれた上根の人にしか許されぬ「狹き路」のやうです。しかし胸襟をひらいてつきあつて見ますと、青年者の多くには、まだ〳〵玉純玉璧なものが可なり豐かに汚されずにあるのを信じないわけには行きませんので、これに向つて何のいのりをもこめないで、打ち過ごすことは、餘りに勿體なく、さればとて、一躍「無所有生活」に立つて貰はうとすれば血が流れ過ぎますし、そんなこんなで、「俗諦成就」の願を「俗諦に在つての俗諦成就」と解して「奉仕日運動」といふ形をとらせて貰ひ、團體運動故平均點で行きますから、さう澄み切つたことばかりにはなるまいかとも杞憂されますが、急がず併し休みなく歩ませて頂きたいと念じてゐます。

來月の奉仕日には　町に必要なことで人のやりたがらない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

町内各所に散在してをる塵埃箱の掃除をする豫定になつてゐます。又、富田兄の御參加を頂いて、奉仕隊當番參謀小林兄のおいのりで「學塾」の開かれるのも、さう遠くはなからうかと存ぜられます。別段これぞと云つて纒まつた専問的知識の用意も御座いませんのですが、所望せられるまゝに、私も多少「職業化」した形式で學塾へ奉仕するやうになるかとも思つてをります。一方、又、東京方面に於いて藤井兄小林(鐵)兄の勞働問題に對するおいのりが、ありがたいので、私として是非おいのりぞへせずにはをれませんし、それに、東京一燈園東京宣光社の具體化、運動の組織化等の重大問題を師か此度の御東上中に目鼻をつけて頂かねばならぬことを考へたりしますと、何もお役に立ちもせぬのに氣ばかりせかれる心持がしてなりません。

京都地方にも、お手をぬきかねる御用事がおありでせうがどうぞ御都合あそばして一日も早く御東上下さいませ。未筆ですが在園諸兄姉によろしく御傳言お願ひ致します。

左に序ながら、奉仕隊歌を記さして貰ひます。推敲もろくにしない拙作ですから、歌になつてゐるかどうかもわかりません。

一

あだや黄金萬能の　掠奪搾取かぎりなき
濁惡の世を如何にせん　人の心に誠なく
愛の燈火かけ暗し　若人の血狂ふかな

二

權力よ榮譽美酒よ　絢爛の華咲き匂ふ
現世、吾も若ければ　戀ふる心の動くとも
はかなき運命何せんや　青春の胸悩みあり

三

餘りに深きこの悩み　狂ふ血潮の高鳴れど
理想の高峯月淡く　天の默示の聲幽か
行手はるかに眺むれば　改革の道茨あり

四

さはれ吾が友嘆かざれ　犧牲奉仕の大業よ
聖き光りに導かれ　學徒の思想培ひて
志士の經綸行ふに　成否は問はな、ひて精進め

五

野末の花に涙する　少女に似たる歌心
さはれ一度顯正の　劒に呵して雄叫べば
三軍の勢ひるむべく　虹霓の意氣君見ずや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

講演旅行に御供して

鈴木五郎

彦根女學校の廊下で、天香さんから今度の講演旅行の記錄を書いて下さいと賴まれた時に、愈々困つた役が廻つて來たと思ひました。昨年の十月信濃の旅以來、色々の因緣から栃木の旅、東京から伊勢路を巡つて京都への旅、京都から山陽地方を經て九州は鹿兒島までの旅、今年になつて一月末の阪神地方の旅、今度の東上の旅と、この五つ月ばかりの間に講演旅行の御供をして、隨分廣い範圍に亘つて托鉢させて頂きまして、折々天香さんから、其旅に就て何か錄して置く樣にとの御話もありましたが、兎角、托鉢先は學校、寺院、教會、工場、個人の御宅、病院、無料宿泊所、托兒所、公園、共同便所と惠まれる儘に變りますが、こつちばかりは何時もボーツと御掃除や、御手傳ひやらさせて頂くばかりで、其時々には色々心を打たれることや、有り難いことがありますが、さて書かうとなると何やら非常におつくうになつて、つい懶けてばかり居りました。

しかし、天香さんが御忙しい時は一日に三四箇所も講演をなさつて、夜は又、皆ぎりぎりの問題を持つて詰めかけられる御客樣方と十二時過ぎまでも御話なさつて、それから旅先へまでも毎日十通、二十通と廻送される各方面からの御手紙を、いちいち御自分で整理されて二時三時までも夜を更かして、朝は又暗い內から起きて不淨の御掃除やら、雜布がけやらをなさるのを見ますと、唯々私共の懈怠な心を申譯ないと思はずにはゐられません。其樣なことを考へると自分が面倒だからと云つて、何時までも投げ捨て置くのも濟まぬ氣がいたしますので、特に今度の二月八日に京都より彦根、松阪、山田、五ケ所、鳥羽、津、刈谷、岡崎を廻つて其昔、天香さんと同鄕の好のあつた靜岡縣島田町の北河豐二郎さんを二十年振りで大井川畔の御家に訪ねられて、同十七日に入京されました旅ばかりでなく、昨年來御供した講演旅行の內で思ひ出すことを、纒まりも無く書かして頂きます。

○

昨年の秋、信濃へ寄せて頂きました時は、十日の旅の內八日まで雨だつたので、一行を御導き下さつた上山田小學校の大內さんには一方ならぬ御厄介を御かけいたしました。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

海拔二千尺の高原の雨に煙る中を歩きながら、大内さんと托鉢に就て色々御話して居る内に、有り難い物語を伺ひました。

昨年の夏、大内さんが暑中休暇を利用して京都の一燈園に來られました時に、一日天香さんと御一緒に或る御家へ托鉢に行かれましたそうです。處がその御家は御掃除も何もすつかり行屆いて居て、何處から手を付けて良いやら解らぬ程でしたので、天香さんに「先生、これぢやあ托鉢する處がありませんなあ」と云ひましたら、天香さんが「大内さん、貴方はまだ下座が本當でありませんね」と云はれましたのではつと氣が付きました、そして本當に其家へ下男に來たのだと云ふ氣になれば、何なりと仕事の無いことは決して無いと云ふことを悟りました、との御話です。私も講演旅行の間に、とかく托鉢先では話を聞かうとなさつて、仕事を與へて下さらぬ爲に、手持不沙汰になつて困つて居りましたが、此御話を伺つてからは、矢張り自分の心の持ち方が間違つて居たことを知りまして、大變托鉢が仕易くなりました。私に採りましては信州旅行第一の收獲でありました。

○

上田市で講演がありました時に、西鹽田村の青年會長さんが來られまして、是非自分の村へも來て貰ひ度いと、天香さんに頼まれました。時間が無いからと云ふのみ顔を見せるだけでも良いからと、無理やりに自働車に乘せて連れて行かれました。

見ると其處は至極穏かな農村です。演壇に立たれた天香さんは、集まられた方々に向つて「皆さんは私共よりはもつと自然に適つた生活をなさつて居りますから、今更私が申上げねばならぬ様なことは何にもありません。今日は此様な淳朴な土地へ自働車などで乘り込みまして、村の子供や娘さん方に都會的の刺戟を與へた罪は、私が此處で一時間や二時間喋つた位では到底償へるものではありません。私は此御近所に吉兵衛さんと云ふ人が居て、其人は四書を讀みこなすだけの力を持つて居て、人が中學の漢文の先生にでもなつたらと勸めると、「否や、先生にはとても怖くてなれぬ」と云はれて、數十年此方ほんの膝を入るゝだけの茅屋に住んで、毎日、照つても降つても自分の村から隣り村まで荷車を曳いて生活して居られると云ふことを聞きました。私は、今その吉兵衛さんが怖くて堪らぬ。どうぞ、私の罪を赦して下さい。そして此の次ぎ寄せて頂く機會がありましたら、其時は此様な高い處へ立たせずに、皆さんと一緒に縄でも綯はして下さいませ」と詫びられまして、歸りに藁を二束頂きまして、御自分で草鞋を作り、吉兵衛さんに上けて頂くように、三石さんに御頼みになりました。

○

その三石さんは、早稲田大學の文科出の詩人です。北佐久郡の農學校で、天香さんに初めて會はれた時に、開口一番「天

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

香さん、講演ばかりして居られると墮落しますなあ」と云はれました。「本當にそうです。こつちは一寸も話し度いことは無いのに、人が無理に話させるのですが、話ばかりして居ると墮落します。何時までもこんなことはして居ません」と天香さんが答へられました。

この純眞な、率直な信濃の詩人は、五日ばかり一緒に步いて居られる内に、全く一燈園生活を離れ難い心持になられまして、松本市の女子師範學校で、初て托鉢に便所掃除をされました時には、三石さんの薫陶を受けた生徒さんが大勢居られまして、淚を流して感動して下さいました。三石さんは昨年の十一月以來、秋田の曙一燈園へ行つて居られます。雪の深い山河を飛び廻つて居る小鳥が、どんなに彼の人を慰めて居ることでせう。

○

私の母も妹も、家の方は勝淳さんに御留守居を願ひまして濃の旅に御供させて頂きました。同行の岩淵さんや、八田さんが一心に托鉢なさいますので、二日目から妹も御手傳ひする樣になりました。皆さんが行く先々で樂しそうに働かれるのを見まして、三日目には母までが「私でも硝子拭き位は御手傳ひ出來そうですから」と始められました。「働くのがこんなに面白いことだつたとは、今まで思ひませんでした」と妹が云つて呉れました。

晝間は皆揃つて托鉢をして、多い時には同勢十三人にもなりましたが、夜は何處へ泊まると云ふ當もなかつたのに、夕方になると私の處へ二人來て下さい、私の方へも二人來て下さいと、引つ張り凧になつて、勿體無い程大切にして泊めて下さいます。停車場へ行けば何處からとも無く次の所へ行く切符が惠まれて居ります。長野女學校の齋藤先生の御案內で善光寺も拜ませて頂き、其上、白蓮坊さんの御厚志で、父の位牌にまで懇な回向をして頂きまして、七日ばかりを天國を逍遙するような氣持で遊歩させて頂きまして、母も「今まで隨分旅行もしましたが、こんなに有り難い旅をしたのは初てです、之が本當の善光寺詣りと云ふのでせう」と喜んで呉れまして、陶然と一燈園生活に落着いて下さいました。私は光の御惠をじつと拜んで居りました。十月の十日に私共は歸京しました。そして又十三日から栃木地方へ托鉢に出かけまして、栃木、足利、鹿沼へ寄せて頂き、三十日の夜久しぶりで母の家へ歸りました。處が家の內の氣分が何となくふだんと違ふのです。母の顏が大層和いで、やれやれと云つた樣な姿なのです。妹の顏も動作も隨分いきいきして、皆がにこにこして居るのです。

母の話を聞いて見ると、信濃の旅から歸つて以來、妹は一切絹の物は着ないと云ふ決心をしたのだそうです。今まで寢間着にして居た物を縫ひ直して、私の着物は之一枚で澤山です、他の重ねや絹物は不用になりましたから、賣つて孤兒院にでも寄附して下さいと申し出したのだそうです。その上妹

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

の心にも一つ大きな變化が生じたのは、妹は昨年女學校を卒業しまして、もう少し上の學校へ行き度いと、その入學試驗準備を一心にやつて居りまして、家の雜用には勉强が濟んでからでなければ手を出さないと云ふ風だつたので、御掃除も炊事も母が一切受持ちでやつて居りました。處が信州から歸つてからと云ふもの、妹は御掃除や炊事を母がやつて居るのを見ると、平氣で勉强して居るのが何となく落着かぬようになつたのださうです。それで、朝起きるとすぐに御掃除も炊事の用意も一息に自分でやつてしまつて、初めてすがすがしい心地で落着いて勉强するようになりました。その爲め運動もついて血色も非常によくなつて來ました。何しろ二十歲の娘が勢ひ込んでやるのですから、母が一日がかりでした仕事が、朝の內二時間もあれば出來上つてしまふのです。母も今までは世間並に良い着物の一枚も作つてやり度いと思つても中々思ふようには出來ず、何かと心を苦しめて居ましたが、妹の方から何にもいりませんと申し出す樣になりました上、老いの身には相當苦勞であつた日々の雜用も母の手を借りずに妹がどんどん片づけて呉れるようになりましたので、體が樂になつたばかりで無く、今までは妹が仕事を嫌つて本ばかり讀んで居たのでは、他へ嫁付いた後で嘸困るであらうと心配して居たのが、もうこの樣子なら大丈夫と一安心しましたので、母は精神的にも、肉體的にも重荷がとれて、「此頃では私は樂隱居だよ、ほんの一週間ばかりの旅に御供させて頂いたのに、こう何もかも重荷が一時にとれた樣になつて本當に有り難い、東京に一燈園が出來たら私も御留守番にでも置いて頂き度い」と心から云つて呉れました。私は光のあざやかさを思はず伏し拜みました。

私が一月近くも家を離れて托鉢してゐる間に、家の內はこの樣に惠まれてしまひました。「陰德あれば陽報あり」と云ふ言葉をしみじみ味ひました。決して陽報を當にして托鉢させて頂いてゐる譯ではありませんが、何處でも托鉢さへして居れば光は何處からともなく此樣に惠み給ふのです。私は此時から純粹に托鉢さへして居れば家をいくら離れて居ても一寸も心配することは無いと云ふ確信を得させて頂いたことを本當に有り難く思ひます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

寂

嘯坪

今日は朝から句境に浸つたが仕事に追はれて句が出來ない此嬉しい句境を具象化したいものである。

其前に老鬪に芭蕉の云つた事をお約束の通り申上げます。『萬象もまた風雅なり。此風雅は佛祖の肝膽なり、造化に隨つて四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なく、思ふ所月にあらずと云ふ事なし』とあります。つまり天地は寂であり、夫れが風雅即ち藝術の核心であり、直ちに信仰の眞諦に合致する事を見抜いた樣で、佛者の『諸法從來常示寂滅相』といふ天地自然の運行大宇宙觀にピタリ一致した樣であります。私は句を此意味に觀、このうちに浸り度いと思つてゐます。此調、此想の芭蕉の句を示しますと

西東あはれさ同じ秋の風
送られつ送りつ果は木曾の秋
死にもせぬ旅寢の人よ秋の暮
秋深き隣りは何をする人ぞ
あか／＼と日はつれなくも秋の風
宿かして名をなのらする時雨かな
凉しさや岩に泌入る蟬の聲
旅人と我名呼ばれん初しぐれ
寒けれど二人寢る夜ぞ賴母しき

等數ふれば澤山あるでせう。風趣餘韻は文章や口語で現はす事の出來ぬものがあります。一つには日本人が專有する寂の本質を取扱ふのにふさはしい俳句、尙一つには寂の分量を最も多く持つて居た芭蕉によつて手本を示された文藝である丈に、吾人日本人に迫る事が鋭く深いのではないかと思ひます。兎に角個性を最も卒直に而も深刻に表現することが出來て其の取扱を上手にやる、即ち素直に自然にやれば嫌味が一寸も殘らぬ丈けによいものと思ひます。

私は詩人としての轉耕老に私の淺い鈍い考を申上げます。尙私は京に在ます天香と申す人に三日間接するの仕合を得まして、油然として句境の潤ふを禁じませぬから夫を句にして見ました。私自身は夫れが嬉しくて獨り喜んでゐます。作例でも何でもありませぬが感じたまゝの心を現はして老鬪の前に呈します。私如きものゝ句を天香翁如き方に見せるのは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

何だか冒瀆の様な氣がしてなりませぬ、併し私はまぢめに何境にあつたのです、兎に角轉耕老翁にのみ内示して御斧正を願ひます。

京にある一燈園なる集まりの人々尊き思ひに惱むもあらん、解けて嬉しき人もあらん、其志に、行動に、皆清く有難し。其人々の上に惠光を憶ひて

思凝つて箒執る庭や霜の芝
冬の庭掃き立つ人に朝日射て
澄む朝を冬木の庭の箒目よ

今朝起れば雪也。遙かに御同人の托鉢を思ひて、

庭を掃く人尊くも雪の朝

其一燈園の兄達、天香翁に接して三日間日夜歡喜の生活をなす、わけてある夜のまとゐと其室の床花中々に印象深し。

歡びや臘梅の庭にしみ〴〵す
好き話聽く夜のまとゐ花椿
白梅や憶ひの伸ぶる夜ぞうれし

翁の蕎麥を好まるゝ天性なり、此生活に入らるゝ最大の障害は蕎麥食ひ得ぬおそれなりしと。其夜會する學校長M氏も頗る嗜好物らしく翁と相對座、箸の上下頻繁なり。吾れ又敢ておとらず、一座暫く法悅と蕎麥の讃美ならざるはなし。面白しともうれし。

蕎麥を好く人の談や梅の夜

寒き夜のつどひや蕎麥の香漂ふ
寒き夜を談歡び蕎麥を食ふ

ある夜談つきず終に黎明に至る翁を惱ますおそろし。

寢よう〳〵と云ひつゝ明けて松の内
幾夜更くるを倦まね欣び庵の春

又ある夜の月光忘れかねつ。

冬の月の洩れ照る聖者の面ざしよ

今は只翁の一投手足にも憧がれの眼を濺ぎ、其惠光に潤ふを覺ゆ。

蜜柑むく師の姿にもうなづきて

翁に別れし翌朝雪しきりに降る、京の寒さや如何にと

京の空を憶ひ眺むや雪催ひ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

留守居（消息）

相武次郎

御立になりましてはや五十日あまり過ぎましたが、其後何の御變りもなく御光へ御奉仕に御忙しういらせられ何より有り難いことに存じます。もう昨今は大分寒くなりましたが、御道の爲めにどうぞ折角おいとひ下されませ。こちらでは相變らず激しい人の出入ですが、兎に角みなまじめに働きまじめに祈つて居ります。どうぞ御安心下さいというて差支ないかと存じます。左に同人二三の近況を申上げます。（中略）

谷野さんは九月初めに能登へ御出立なされて以來諸所で御托鉢と見えまして、未だに越前あたりをさすらうて居らるゝらしう御座います。住所は不明です。園が懷しうなつてきたから紅葉の頃までには歸りたいというて今日も葉書が來ました。

建仁寺の柴田さんが少し氣分がわるいというて診察して頂きました。營養不良だとのことです。それで暫く靜養して來るというて今日美濃へ御立ちになりました。そのあとへ明日あたりから小林さんに行つていたゞかうかと思つて居ります。朝夕鐘をつく位であまり忙しくなし、靜かでもありますから繪を書くには便宜だらうと思ひます。

綾部から來られた中野さんといふ中年の方がありましたが一通り世の中を渡つて來られた方にも似ぬまじめな方でしてもつと深刻痛切な現實にふれたいとて大阪へ去つてしまはれました。（中略）

李さんは九月の上旬歸園されまして其後、御所や河道屋や濟世病院などへ托鉢して居りましたが、急に家庭の方に心配なことが出來ました由で五六日前に朝鮮へ歸られました。暫く牧師の生活をするの已むなきかに到るかも知れないが、許されたらまた歸園しますからどうか宜しく頼むというて行かれました。（中略）

入園希望者は天香樣御歸洛まで待つて貰ふようにとの御ことづけでしたから、隨分辛ひ思ひをし乍らも入園を拒んで居ります。然し御斷りしても去らない方は其儘御客樣にして居ります。

皆もそうですが殊にお德さんや内田さんは淋しがります。お德さんは十一月の末に兄さんが歸國されますので、一所に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

歸國して暫く靜養しようかなど一寸洩らしました。内田さんも十一月になつたら御母様の所に歸るといふてゐるそうです。

唯一の望みをかけし御光は容易に見えず、といふて一時なりと慰めて貰ふ世間の樂しみからは離れて居りますので、心の寂しさを醫すにすべなく、皆迷ひがちなやうで御座います。

本多さんはからだも御丈夫になり、心も可成りおちついて働いて居られます。こんなおちついたことは今までにないと喜んで居られます。ありがたいことで御座います。

それから立山様が五六日前に急に姿をくらましてしまひました。工場はいやだ殊に監督などはいやだと常にいうて居られたそうですが、然し今度のことの近因はむしろ、故郷の寺から歸れとの再三の催促にあるらしう御座います。只今何處に居られますか行衞は更に分りませぬ、貧民窟か特殊部落にでもはいつてゐるらしい形跡もありますが。

そう申しますればまじめな人は、多く、虐げられ踏みにじられ辱かしめられたる人々の涙の前に額づき、彼等の惱みに奉仕したがつてゐるやうで御座います。

さて私自身はたゞ祈りの深く純ならんことをのみ希うて餘念ありませぬ。已れをすてゝ不二への祈り。朝も晝も夕もそればかりで御座います。かゝる運命も喜び感謝致し、お光の大御前に額づきます。已れをすてゝすべてを捧げ、一切の高尙けなものにさへ囚はれざる自由な權威ある生活、貧しけれど富者を恐れず、身賤しけれど高く貴き人を恐れず、愚かなれど智者學者を恐れざる力ある生活の喜びが微か乍ら見えそめたやうな氣もしまして有り難いことに思うて居ります。それが全然ハツキリと實生活に體現されるまでにはまだ長年の修行がいりませうけれど、何だか今死んでも惜しくないやうな氣も致します。何事によらず御光の大御前に手を合せるほかありませぬ。

十一時打ちましたから休ませて頂きます。朝五時から夜十時まで全く寸暇ありませぬ非常に疲れて居りますけれど御かげ様で病氣にもなりませず有り難う御座います。（下略）

（十年十一月十四日）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

岐阜行（自大正十年十二月十四日至同年十七日）

H、M生

第一日。京大の哲學會の席で森さんの一燈園生活に關するお話を聞かせていただき、次で「懺悔の生活」を讀ませて貰つたのが因緣で、一昨日天香さんにお目にかゝり、今日はかうして天香さんに連れられ托鉢とやらをさせて頂く事になる

朝六時の上りで京都を立つて岐阜へは十一時頃、昨夜の雨でぬかつた町はづれを海野さんと言ふ方に案內されて十町計り、仙波太郎さんのお宅に着いて直ぐ私共は托鉢をさせて頂く。天香さんに心配していただいた紺木綿の筒袖の上つ張りを洋服の上へ着込むと一寸變な氣持になる。私には初めてゞ勝手が分らない、何でも同行の木暮さんや村澤さんのされる樣にと思つて、先づ下便所から物置や流し元門扉などの拭き掃除を少しさせていたゞく。成程これなら敎壇の上の苦しい柄にもない仕事よりは私にも幾分落付かせて貰へる樣に思へる。お晝の供養を受ける。奧樣やお孃樣のお接待に、慣れぬ私は只恐縮する。

午後の三時頃から戸本さんと言ふ方の案內で、美しい赤松の小山の懷に抱かれた樣に立つて居る市の商業學校とかに行つて、其所で宿直室のお掃除をさせていたゞく。放課後で生徒さんも先生方も大方歸られた後年取つた小使さんが不審さうに、そして不平さうに私共のする事を見て居られる。何も知られぬ小使さん達の爲には闖入者である樣な氣がされて無理もないと心でお詫をする。一時間餘りですんで仕舞ふ。

戸本さんのお宅へ連れられお湯を貰つて休ませていたゞく天香さんも來られて一緒に晩の供養を受ける。七時頃から山の半腹に、とある倶樂部の樣な所へ行く。澤山なお方々が集まつて居られる、天香さんの一燈園生活に關する色々のお話が二時間ほど。多くは「懺悔の生活」に出て居る樣な事であるが、讀むとは又違つた光に觸れる樣な氣持で初めての私はしみ〴〵と聞かせていたゞく。講話が濟んで天香さんは仙波さんへ、私共は仙波さんの農園にある郊外の海野さんの假寓へ、其所で私共は泊めていたゞく。

第二日。六時過、起きて家の廻りのお掃除をさせていただく玆は町から可なり離れた矢張り美しい赤松林の小山麓、落付いた好い心持の田舍、家の周圍は矢張り赤松林である。折から

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

昇る美しい旭の光を一ぱい受けて、斯うして茲で靜かに箒の先にかさこそと鳴る枯葉の音を聞きながらお掃除をさせて貰ふ。何とも言へぬ好い氣持である。許されるならいつまでも斯うして居り度いと思ふ。

朝の食事の供養を受けて、又海野さんに連れられ、茲の公園の中にある有名な名和昆虫研究所へ行く。天香さんも來られる。昨夜來られた宗藤さんと四人研究室とも思はれる建物の一部を、所員の方に手傳つて貰つてお掃除をさせていただく。

午後は名和さん御自身の案内で詳しく本館を見せて貰ふ。名和さんが三十年間心血を注いで完成された、世界でも有數なものださうな。集め收められて居る昆虫の數が十幾萬とか成る程と貴く拜まれる。白蟻研究の記念としての色々珍らしいものも澤山見せていたたく。所員の方や名和さんの御家族共外三四十名の方々が集まられて天香さんの講話を聞かれる。

夕方天香さんも一緒に海野さんのお宅へ連れられて行く。夕日に照りはへた稻葉山が限りなく美しい、何とも言へぬ美しさだ。凡てが美しい、山も川も空も土も木も草も。凡てが限りなく豐かな生命にめぐまれて健やかに息づいて居る樣だ。何だか嬉しい樣な、有難い樣な、祈り度い樣な氣持が無性に込み上げて來て、度々眼瞼が熱くなる。溫かな母の懷に嬰兒として抱きしめられて居る樣な氣持がする。

海野さんで母堂が心づくしのおうどんの供養を受けて岐阜驛へ行く。午後八時頃の汽車で高山線美濃太田に向ふ。海野さんと名古屋の東海中學の豐島さんが同行される。車は無暗に搖れる、四五日前に開通したのださうな。はがきとペンを出して友へ通信をと思つたが手が震へてとても書けさうにない。天香さんは大きな手紙の束を取り出して整理に餘念がない。次から次へ讀んでは、切りに葉書の上にペンを走らせて居られる。「よくこんなに搖れるのに手紙が書けますな」と言つたら、「慣れて居ますさかい」と事もなげに續けて居られる車中の餘り明るくない電燈に照らされたお顏が心からか蒼白く痛く疲れて居られる樣に見える。殆ど不眠不休で東奔西走の旅の車の中でまで、こんなに求めるもの惱める者の爲に、と思ふと勿體ない、私共はかうして時間も空間も食ふ事も寢る事も考へる必要なく、母の背にある小供の樣に連れられて行く。噫すまぬと心で拜む。

美濃太田驛には三四人の學校の先生らしい方と二三十人の青年の方々が幾つもの提灯をつけて迎へに來て居られる。其中に澤山箒の樣なものを持つて居る方がある。小さな町らしい所を通り抜けて木曾川の渡場へ着く。晴れた空に冬の月が冴えて流れに碎ける光がことに美しい。河を渡つて町筋らしい所を通り抜け、ゆるい斜面の廣々とした高原の樣な感じのする所へ出る。夜は更けて月は愈々冴えて行く。落付いた天香さんの歩みは不思議に早いので、兎もすると後れ勝にな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

る。路邊の枯草が白く月に光つて荒野を行く樣な神秘な氣持にさせられる。月光を浴びた天香さんの姿があたりの光景と何とも言へぬ良い調和を保つて居る樣で、拜み度い樣な氣持にされながら後から隨いて行く，私の足は可なり疲れて重い樣であり、高原の夜氣は冷たく身にしみる樣だが、心は溫かく魂は輕い。淋しい樣なしかしなつかしい樣な夢見心地で私は蹤いて行く。不圖使徒時代を目のあたり見て居る樣な氣持にされる。此儘斯うして何所までも地の果までも連れられて行き度い樣な、かうした旅を久遠に續けて行くもの丶樣な氣持にもなる。

一里半か二里も歩いたと思ふ頃、一つの小さな村に着いて大澤さんと言ふお宅へ案內される。町長さんや小學校の校長さん等も來られ青年の方々も集まられて天香さんから一寸挨拶があり、其所で泊めていたゞく。玆は東濃可兒郡今渡町の河合區と云ふ所。

大澤さんは玆の小學校の先生で青年會の世話もして居られるのであるが、先に「懺悔の生活」を讀んで深く感激された結果、青年の方達にも光を移され、色々と社會奉仕の仕事をされて居るので、驛へ迎への青年の方々の手にあつた箒は、斯うした貴い奉仕の心の象徵と知られて有り難く思ふ。斯くて大澤さんは今度の天香さんの岐阜行を新聞で知られ、青年の方々の熱心な希望と校長さんや町長さんの依賴をもたらして、昨日はるぐ＼岐阜に天香さんを訪はれたが、天香さんも大澤さんの熱心と純朴な田舍の青年さん達の美しい氣持とに引付けられ、愈斯うして遠く玆まで托鉢に來られたのである。

第三日。五時頃起きる。床を上げ部屋み片附けなどして庭に出る。早くも青年の方々が多數集つて居られる。霜に冴えかへる殘んの月を西に仰いで私共は庭のお掃除をさせていたゞく。青年の方にも甲斐々々しく手傳つて下さる。今日は天香さんも素足に箒を持つて下りて來られる。一同近くの氏神樣にお參りする頃やつと東の空が白んで來る。皆で境內のお掃除をさせていたゞく。何にせよ多人數、またゝく間に濟んで仕舞ふ。歸りに小さなお稻荷樣のお社にも參拜して其所をも掃かせていたゞき、青年會館だと言ふ極めて質素な建物に集つて、青年の方々と一緒に朝食の供養を受ける。天香さんは十七年の昔此生活を始められた當時の話をされ、青年の方々から漏れなく一箸づゝの供養を受けられ、尙釜底の御飯一碗をいたゞかれる。永い間險しい都會の空氣にばかり馴れて來た私の眼には、純朴な眞實な玆の青年の方々の樣子が淚ぐましいまで貴く拜まれる。淸い食事も濟んで天香さんから尙何かとお話があり、それから私共は青年の方々に草履の作り樣を敎へていたゞく。やつて見ると初めは何とも分らぬ變な形のものが出來、しかも最後の仕上げに遣りそくなつて、私は天香さんに笑はれる。之れは流產だな、と考へて一人で可笑しくなる。今度は眞劍にやり直す。どうやらそれらしい形のものが出來上がる。流產がたゝつて私は最後に取殘され、庭

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

の隅へ蓆を移して貰つてやつと仕上げる。もう其邊が綺麗に片付けられて居て耻かしくなる。良い心持だ。どつかと大地に坐りこんで、小春とも思はれる溫かな白日の光に存分に抱擁されて、覺束ない手先に右から左、左から右へ運んで行く幾筋かの新藁のさら／＼と鳴るかすかな音と共に、其高い香をなつかしみながらやつて居ると、無性に嬉しい様な落付いた氣持になる。かうして一生草履三昧とかに暮すのも悪くない様に思はれる。

午後其所から十幾町も離れた小高い所に在る町立の小學校へ連れられ、玄關前で青年の方々と一緒にカメラの內へ收められる。學校はもう退けて先生方だけが居られる。講堂で天香さんの講話がある。一燈園の生活態度と田舎の純朴な剛健な氣風とに就てのお話である。二百許りの方々が終始緊張した態度で聞いて居られる。夕方大澤さんのお宅に歸つて晩の供養を受ける。夜は婦人の方々の爲特に青年會館で天香さんのお話があり、今日も大澤さんで泊めていたゞく。

第四日。六時頃起きる。九時頃まで色々座談に花が咲く。しと／＼と降り出した雨は此清い集ひを一層しめやかなものにする。私は有難い涙ぐましい心持で默つて聞かせて貰ふ。私には默つて斯うして聞かせていたゞいて居るより外仕方がない。美しい大きな交響樂に聞きほれて居る時の心持である天香さんは今日はことによく響かれる。折々默つて瞑目される天香さんの顔に何とも云へぬ悲痛な陰影が往來する様に思ふ。十字架を負へる人と言ふ様な氣持がする。噫すまぬと合掌したい心持にさせられる。

愈本降になつたらしい九時頃を、大澤さんのお內の方々や其他の方々にお分れして、青年の方々に送つていたゞき驛に向ふ。驛で見送りの方にもお別れして車中の人となる。汽車は木曾の流れに沿うて走る。雨は止む、良い景色だ。犬山のあたりことに勝れて見える。午少し前岐阜に着く。木暮さんと二人は別れて一寸仙波さんへ挨拶により、三時の列車で京都に歸る。天香さんは岐阜から御郷里長濱へ立寄られる筈。（終）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

南都遊歩

道徹

大阪の托鉢先を、朝八時頃辭して奈良へ向ひました。始めての乞食行脚に、冷めたい風は吹きまくつてゐます。奈良街道を漸く暗がり峠迄來ました時には、はや十一時頃にもなつてゐました。生駒山には雪は見えませぬが峠道には厚い霜柱が解けかかつてゐますので、草鞋や足袋はじめじめになり、足先きはたまらない位に冷めたさを感じます。それに足は大分疲れて來ましたので峠の中程で午飯をすませて復歩きました。疲れた足を引摺る樣にして菅原村迄たどり着きました時には、奈良の町も見えてゐます、大佛殿も小いさな森の中に見えます、ここまで來れば奈良迄着いたも同じだと思ふと、もう一步動くのもいやになつてしまひました。未だ少しは早いのだが此の村で泊らして戴きたくなりましたので小學校に行き校長先生にお逢ひして、風と露さへ凌げる處なら有難いですからと言つてお願ひしましたが、役場に行つて賴めとて斷られました。私は仕方ないので、校門迄出で合掌して心經を唱へましたら、氣も落ちつき、有難う御座いましたと心から感謝する事が出來ました。もうその時には、足の疲れは何處へやら、いつの間にか私は元氣になつてゐました。此の村にある特別保護建造物の法相宗喜光寺の金堂に參拜さして戴きました。奈良の町に着いた時には、未だ早いと思つてゐた日も何時の間にか暮れてゐました。何んだか氣がせいてくる、寒くはなる、兎に角寺をめあてと思つて三四の寺を訪ねたのでしたが、どの寺でも斷はられてしまひました、普通のお宅では尙更の事斷られました。もう宿をお願ひするのが厭になつたので、三笠山の方へ步いてゐました時、或る一人の人に戒壇院の久保田老僧の事を敎へられましたので、そこから遠くもないその院を訪ねましたが、耳の惡い老僧には、庵まで大分はなれてゐる表門からはとても聞える筈がなかつた。私はもう疲れてしまひました。寒さは加はり、あたりはひつそりしてくる、もうたまらなく悲しくなつて來ました。夕飯は持つてゐる、只それだけが力なのでした。步けない位に疲れましたので大佛の山門にでもやすませて戴かう、と思ひまして來かかりますと、左手に大きな門がありその横に小ひさな小門がついてゐました、何心なくその小門を押して見ましたら、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

あら有難や、ゴツトゴツトと大きな音さして、開いてくれました。私はもう何にも考へる隙もなく入つてゆき宿をお願ひしました。始めは進まぬらしくもありましたが兎に角草鞋を取つて上れと言つて下さいました。玄關に腰をかけ草鞋を解く時、私は何んとも言へない有難さ、嬉しさに胸は一抔になり、泪の流れるのをどうする事も出來ませぬでした。光はこの小さな私をも見捨てはしませぬでした。これが眞劍にならずにゐられませうか。これが祈らずにゐられませうか。

　このお宅は、東大寺の執事で鷲尾隆慶さんでした。その内奥さんもお歸りになりました。大阪の汎愛女學校の先生だそうでして、廣島の藤井さんのお妹さんと同じ學校なので、一燈園の事はよくお存じでした。思はぬ所で思はぬ御縁が結ばれました、これと言ふのも偶然ではなく、皆、光のお導きなのです。その夜は東大寺の內の華嚴宗勸學院で泊めて戴きました。翌朝は早く起き庭の掃除をさせて戴きそれから鷲尾さんのお宅で便所のお掃除をすませて朝飯を戴き、大佛殿、二月堂、三月堂、念佛堂を丁寧に地圖を書いて下さいましたのでそれに依つて參拜さして戴く事が出來ました。嫩草山(三笠山の事)にものぼり大和平原を一望の內に眺める事も出來ました。それから春日に參拜して、その神鹿の多いのには驚きました。その多い神鹿が參詣人に對して丁寧に頭をさげて鹿せんべいを貰つてゐました。本殿に參拜をすませて下りる時、一匹の大鹿が亦同じ樣に頭をさげてゐます、私は何んの氣なしに見てゐました。私はその鹿の前を通りかかりました。かの大きな鹿は丁寧に私に向つて頭をさげました。この時でした、この小いさな私の心臟は破裂したかと思ふ程ハツとしました。そして周章て私も鹿におじぎをしました。その時から私は自分の力弱さ、愚かさ、そうして我の强さをつくづく感じさせられました、これが本統だ。自分も頭を大地につけて乞はなければいけない。あまりに、あまえ過ぎてゐたのだ、何故もつともつと眞劍に乞食をしないのか。

　私はたまらなく責められる樣な氣がし出しました。

　その夜はまんぢりともしなかつたのでした。翌朝お掃除をすませ、鷲尾さんに昨日の出來事をお話して、その日から生れ變る思ひで法名を戴きました。その朝私が便所の掃除をしてゐるのを陰から御覽になり、この人はきつと一燈園の同人に違ひないと、直覺したのだと言はれて私をお訪ね下さつたお方が御座いました。そのお方は柿本さんと言ひ、娘さんは女子高等師範を出なされて今は女學校の先生をしてゐられ、又御自身は昨年迄女子高師附屬女學校の先生をされた方で、お二人共懺悔の生活をお讀み下さいまして一燈園の事はよく御存じでした。その日學校に行き青木先生にお逢ひしまして、寒い間食物の少ない神鹿の爲めに、私が三笠山の硝子の破れや壜を拾ふかたはら、參詣人にお願ひして供養されたものの全部で食物を貰ひ與へる事をお話ししました。先生も贊成して下さいましたので早速に始めました。春日神社の禰宜

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

の森口さん、愛市會幹事の上林さん等と、次から次に有難い御縁が結ばれました。午後の二時頃でした、もう幾人かに御供養されてから、一人の紳士が通りかかりましたので、お願ひしますと、五厘錢を大地に投げつけたまま行かれました。その時私は、どんなにしてよいか判らなくなりました。その五厘の前の芝生の上に坐つたまま合掌してゐました。悲しくもなりました腹立たしくもなりました。だけど、心を靜めて祈つてゐる内に、やつぱり有難い氣がし出しました。行つてしまつた紳士の後をいつまでも坐り乍ら泪ぐんだまま合掌して祈つてゐる私を、附近にある宿屋の人達は大勢で變な顔して眺めてゐました。この五厘一枚のために、紳士や他の大勢の人達とに深い因縁が結ばれた樣な氣がしますので、私としてはこの有難い乞食はやめられないと思ひます。又『若い奴が仕事が仕度ないのであんな事をしてゐるのだ』等と言はれるお方もあります。私はその度に勵まされてゐます。光は何時も私の上を護つて下さる。その夜からはあちらにもこちらにも泊りにこい托鉢に來い、と言つて下さるお宅が出來ました。私として今度の乞食行脚位はつきりと光の有難さを體驗させて戴いた事はありませぬでした。自分としても大變落つけますのを何よりと感謝してゐます。

冷めたいみぞれの降る中を跣足のまま歩いてゐたのに、一軒の家で下駄を供養され又一人のお方から足袋を供養されました。光は何處迄も私を勞り下さいます。もつたいない氣が致します。合掌。

（上略）あはたゞしい東京の生活は走馬燈のやうでした。私は山へやられる運命を選びましたが、こゝには陰鬱な日の連續がありました。

嘘のやうに積つてゐる雪、東北の荒寥たる生活に、沈默と悲哀と忍從と。――地方的特色の、かじかんだやうな衰退からものあはれな卑屈と方便とが生れるやうです。

私には詩があるだけに憧れはありますが、せめて赤裸々の自然のやうに、なぜ人間は互に許し合つてくらすことが出來ぬだらうとも考へました。

しかし土地の方は親切です。私はなるべく土地に卽きたいと思つて、H町を中心として活動させて貰つてゐます。山の春もそろ／＼近よつて來ます。

都會へ／＼と流れる心のどよめき……結局は都會ですね。お世辭とうるさい表面のいきさつがありましてもね。

皆樣のお宅に集まれば、心を開放して何もかも言はせていたゞただけに、いろ／＼おなつかしい思出ばかりです。あのよく歌を作られる小さいお孃さんの活潑な姿が眼にうつりますよく躍らせて、よく歌はせて下さい。（下略）三石勝五郎兄より

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

「懺悔の生活」を手にして

岡田次郎

思ひきや、この貴き著書の主から、讀後の所感を書き記せとの沙汰に接しようとは。それを承つたのは、始めて一燈園を訪れた大正十年七月二十三日の夜の或る時であつた。私とこの書との因縁はその廣告を拜見した時からだけでも決して淺いものではない。故に若し之を讀過することが能きた後には、書くべきことの乏しきを憂ふる者ではない、寧ろ多きを思ふべきであらう。否、之を手にしたゞけでも、すでに書くべき多くがあり過ぎる。憂とするところは、何の語を以てそれを言ひ現はすべきかである。私が著者からその沙汰を蒙つた時に、ぎくつとしたのも、所詮はそこにあつたことを、今にして知らしめらるるのである。

さらば何を語らう!。

名けて『懺悔の……』といはるゝ誰か果してよく懺悔し得たる?私の如きは、どうかしてこの我を言ひ現す場合に、『私』といはないで濟ましたいと、それをこの年頃の祈願と致して居るのであるけれども、どうしても『私』といはざるを得ぬのである。それほどに、私が取り去られぬのである。拂へど來る夏の蠅、拂うても拂うても、私の取り去られぬのを悲しんで居るのである。さやうなこの私が、どうしてこの「懺悔の生活」を讀んで云々させらるゝ資格があらう。

卷頭に「無一物中無盡藏」と記されてある。これも亦私どもが念々に念じて居る語である。餘計なことながら、私が『無々庵』の稱を假りて居るのも、それがためである。この奇拔な扉を置かれた、その著想に向つて、私は嫉ましいほどの喜びを獻げたい。

次に置かれた一燈園の寫眞の如何に貧弱に見えることよ。寫眞を見たところでは、茫々たる原野の中に、一寸した風にも吹き散るを恐れらるべきほど憐れなる孤兒院か何かのやうにも見らるゝのである。一燈園のこの寫眞を見る以前、私は獨りぎめに勝手の妄想に浮べしめてゐた構想があつた。が、それはこの寫眞を見ると同時に滅茶々々に壞されて了つた。

大正十年七月二十四日の夕暮、雨の道を踏んで私が一燈園を訪はしめられたのも、一はその構想を破壞された悲しさを回復したいとする小さな變な慾望が手傳うたことを、今にして思ひ出づるのである。

建築は一個の藝術である、藝術は人格の表現である。そんなことは此頃の美術學校の書生さんでも知つて居る。建物が如何なる人を迎へるか、棲む人と建物との關係には、もつと〳〵もつと〳〵深い神秘的なる運命がある。神秘的な運命は、それに直參し得ることを許された人のみが、知り得ることである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

一燈園に行つて、一夜の宿りを味はせて貰つた私の感想は別に又新たなるものを得た。さうして寫眞の表現の貧弱なこと等は、最早問題とならなくなつた。その内在的理由は別に愚見を申述べる機會を得たいと存ずる。

只行つて見ても、行つて見なくとも、一燈園の建物の積が大きな堂々たる伽藍と異ることだけは事實だ。すると矢張り貧弱たることは免れぬ。更に言ひ換ふれば「孤危」なりだ。けれども、本當な物は何日でも何でも皆孤危の相を現はすものだ。その孤危な相が更に尊い所以は『道無横徑。立者孤危。』といふところへ聯想せしめて、私は喜ぶのである。

建物ばかりではない、西田天香氏のあの短衣孤葛の姿が、既にすでに孤危だ。それがしつくり似合つてゐるのが實に妙ではないか。さし味は世の中だ、さし味のケンが天香氏だ。手本は何日でも小さく出來て居る。大道は宇宙に遍滿して居る、實證は大きなものを必要とはせぬ。雪路を歩んだ老親鸞の如何に孤危であつたらうかよ。本願寺の大伽藍が作られた時、藝術は制作されたが親鸞の活きた生命は、伽藍の内殿に居たか、棟の上にゐたか。それとも遠く飛び去つたか。私の知るところではない。

話が命題の中心から外れ出して來た。

次は『光明祈願。』

さあ、大變なことになつて來た。批評の文句を案ずるのではない、之を讃歎するのが大骨だ。西田氏自身、それを説明するために、この本を著はされて居る、否十八年の歳月をそれに費されて居る。誰やらは一指を立つることに終生を用ひて尙餘りあつたといふことである。門外漢が無用の蛇足を容れようたつて容れらるゝものではない。況して行持しない者が、何で喙を挾み得よう。

私は謹で拜讀させていたゞかう。さうして讀み得たところのどれだけを實證し得るか、更にこの私がその「私」をどれほど取り去り得るかを、後日に驗しよう。皆樣もそれを御覽下さいませ。

この書が顚倒のこの世に於て、驚異の種となるべきことは、いふまでもないことだ。

爾餘他の諸賢の御噂を拜聽させていたゞきませう。私はすでに多くをいひ過ぎた。妄言多罪。（大正一〇、七、二五）

○『懺悔の生活』を讀まして頂いてからの私

（大阪）松本榮藏

懺悔の生活を讀まして頂きまして私は感泣致しました。私は御慈悲を頂いて御慈悲に反いた日暮しを續けて居りました。天香さん有難う存じます、一燈園の氣分で食事を頂きます、一家の主だと云ふ我を捨てゝ一番下座に着きます。禍は口より出づると知りながら心にもない事迄つい口にし、御信心の語だとて言葉の遊戯にふけつて居る、危い事です、大抵の場合はだまりません。子を打つといふ事は恐ろしい事ですが、つい無雜作に打ちます、天香さん有難う存じます、一番下座に落ちた私にはもう子を打つ權利はありません。罪惡深重煩惱熾盛の衆生と仰せらるゝ御言葉に私等は甘えて居りませんでせうか。南無阿彌陀佛、なむあみだ佛、『なむあみだ佛、ともすれば安逸な生活に落ちんと致します私にとつて尊い刺戟でありました。私は今本當に光に照らされて更正したやうな氣分が致します有難う存じます。一燈園の托鉢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

氣分で私は本當の私に仕へさして頂きます。私は私の家と店へ仕へさして頂きます。私は私の町と寺に仕へさして頂きます。私は廣く一切に奉仕させて頂きます。(十五日)

其後の煩ひ。天香さんは眞裸になつて十字街頭に立てと仰せられるがそれは天香さんにして初めて出來る生活でなからうか。私は眞裸になり得ない。私にそれだけの勇と緣とがない。私は一燈園の氣分で家で死なう！それでよいのか？

相愛講堂で山中樣の御話を承つて私の思うて居る所とぴつたり合つて私は嬉しくてたまりません、その御話に、私の只今の考へでは街頭に立つて奉仕するより奉仕の氣分で藝術に從はう、つまり家で死んだらよいのだ、私は子供に敎育してやりたい、といふ意味の言葉があつた。(二十日)

下座に着いたつもりの私、天香さんに眞似て下駄の鼻緒をすげる。暫くたつと、オーイ見て吳れ俺れは下座に着いて下駄すげてるでとの念が浮びましたのでその下駄で頭をなぐつて暫く泣きました。同行上田さんに問ふ、私は駄目です、頭で思うたり判斷したりしてゝも一步ふみ出せばすぐこだはります、もう理屈ぬいてだまつて天香さんの御身體にふれて來うと思ひますが如何です。上田樣の言はれるには、行きなさい吾々は餘り知りすぎて居ります、これからもうそろ／＼だまつてやらうじやありませんか。(二十一日)

六時宅を出まして一燈園を訪ひました。御留守でしたが園の香なとかゞして頂きたいと申しまして一巡見せて頂き、すぐ杉本樣で先生に御會ひ申しまして、下座を敎へて頂くより味はせて頂き度のですと申し上げ早速『懺悔の生活』で見た一燈園氣分を出しましてシャツ一枚になり折柄着しました本を整理させて頂きました。御飯を頂いて居りますと、今來た私と先生と同人方と紙一枚のへだてもない懷しい氣分が湧いて參ります。

これに返事書いて下さいとの先生の仰せをハイと受けとれるのも不思議な位です。暖かな氣分を味はして頂きまして九時歸宅致しました。(二十二日)

午前二時眼覺め『懺悔の生活』を島田樣乾樣上田樣に御送りする。二日間の用事を書付けて八時先生の許に着きました。どなたも居られぬ。尊嚴に打たれ暫く用事をさせて頂いて居る內先生が托鉢に行きませんかと仰せられる。ハット私は驚きました、私の一番きらひな掃除ですものそこまでの覺悟はありませんと申しましたが、お前は何しに來て居るのだと反省させて頂きますと同時に、只今の言葉は取消します、やらして頂きますとお願ひして、皆さんの行つて居られます小林樣方へ參りました。美しい托鉢氣分を味はせて頂き、夕方先生に園へ御供してとめて頂きました。眠くなつて來たし、もう何の理屈も疑問もありません。何だか鐘の響をきいて御慈悲の雲の中に居るやうな氣分がいたします。(二十三日)

同人方は御休みの日ですが、私は昨日半日だけの托鉢でおひるの御飯を頂く資格がないやうに攻められます。金で償へぬ苦みが浮びまして、持ち越して來ました返事七通書きまして漸く氣分が落着きました。

あゝ下座を徹底させたならば賢愚男女打ちまぜてからも美しいものがと驚きます。おしやべりを止めて靜に步み始めませう。

(二十四日)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

○　　　Ｓ　Ｓ　生

唐突に御邪魔する事を許して下さい。私は近頃御著「懺悔の生活」を讀ましして頂き今迄にない感じを得まして今御邪魔をする次第であります。

卒直に申し上ぐれば私も一燈園で修業させて頂きたいと思ひ立つたのであります。そして同書の卷末の遠方の者は打合せの上といふ御掟に依つて一應御伺ひする次第であります。私は今年四十三歳になる者であります、御迷惑は恐れ入りますけれども一應私の入園を御願ひするに至りました次第をこゝに書くことを御許し下さい。

私は岩手縣の中程北上川の沿岸の小さい村の、村ではとにかく一流の家に生れ、幼い時から虚弱で二度ばかり死んだ事があると申します。それで内氣な子供でありました。今でも其性質は變りませぬ。

私が人生は辛いもの儘ならぬものといふ事を知つたのは、十六歳の時に義兄に死なれて老父母に侍すべく學校をやめればならなくなつた時からでした。次には結婚問題で苦みました。そんな事からと又自分の性質とから、自然に人生問題を考ふる様になり、百姓仕事の監督家事の手傳ひをし乍らイロ〳〵の本を讀んだり、宗教の講話を聽いたりする様になりました。それから父にも死なれ子供をなくしました。其後、酒造家であつた姉婿に父の時代に保證物を貸したのが腐れ緣で義兄の慘憺たる破産に引きづられ、多くもない家產の三分の一ばかりを保證債務の爲めに失ひました。此の時は三四年間隨分苦みました。執達吏だの强制貸だのといふものを知り又人といふものは苦しくなればどんな事でもするもの、人の一面は獸の様なものであること、生活の脅威などいふ事を痛切に味ひました。引き續き年を取るに従つて現實相の表裏をまざ〳〵と見ました、自分といふものもよく見ました。一方地位身分相應にいろ〳〵の公職いろ〳〵の委員とか理事とか村郡の議員とかにもなりました。四年前には義理に詰まつて餘義なく村長の職に就き村の難局に當りました、それで丸三年勤めて昨年の一月逃げました。其間にも始終念頭から放れなかつたのは自己未生前の面目去來歸趨生存の意義、此現實界に對する懷疑、理想と現實との慘ましき矛盾の悲哀、自分といふものゝ果敢なく情けなく淺間しさ世界の淺間しさ忌はしさを見ずに居られなかつた事であります。それで切に感じ事に觸れては、かくしては居られぬといふ焦燥の氣分に迫はれて、修養といふ事を忘れるには餘りに自分は神經が銳敏でした。故に自己心内の闘ひは不斷に續きました。本も雜誌も讀みました默想もしました、眞宗の知識様に就いて共說も聞き、友人と談論を叩き合ひました、禪宗の師家に就いて坐禪もしました、けれども、私は何とした宿業の深いものか、他力の安心を得ません、靜坐も駄目、公案一つも通り得ず、自分で情けないと思ひ乍らどうすることも出來ません、未だに分つた様な分らぬ様な、ガラス一重が障害物で、誰かの小說にあつたガラスの内側に徒らに悶へる蠅の様な自分であるのであります。かゝる有様で何をして居つても、自分の根柢が定まらぬ爲めに眞劍になることが出來ず、世間の人々と眞から調子が合ふといふ事はありません。故に時々心が暗くなります。日々の生活が虚僞不實の様に思はれてなりません。村長をやめたのも——實は村自治といふ事に付ても多少の抱負がある積りで、在職中はとにかく多少の努力を試みましたので相應の成績は擧がつた筈です——自分には家としての用事は復雜なり、財政整理の職務もあり、それに義兄の破產の結果として妙な破目から五六人の株式で酒屋を經營し居り自分が社長といふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

事になつて居る樣の次第で、多忙の境遇にある爲めに、三方に力を分ければならぬのに何れにも腰を落ち付けて專心に努力が出來ず、病弱の身を以て之に處して行くは苦痛なり、一方例の自分の心の安定がなく家も齊つて居ないのに、人の爲め世の爲め努力も何となしに自分には虚僞、二重人格の生活の樣に思はれて、現狀の持續は徒らに自分を苦めるのみと思ひ、退いて靜かに修養しつゝ純農の生活をするのが自分の行くべき道なるべきを考へて、無理々々退職を決行した樣な譯でありました。職を退いても理想と現實とは相去る遠く、特に初秋より病氣と怪我と思ひ掛けぬ事が引き續き今盛岡の病院に來て居る樣の次第、一方前記の如き事情にて經營し居る酒屋は、村長就職以來親戚の者に全權を任せて支配させ來れるが間違ひにて、其者が副業に手を出したために失敗し、近頃は危險狀態に陷りたる樣子にて其の結果は又第二回の破產整理を要することにもなりさうなる狀況もあり自分の運命の拙さ現實の悲哀をつく〴〵感ずる次第であります。

近頃道元禪師の正法限藏を每朝に拜讀して居りますけれど、例のガラス一重が何とも致し方がありません。一事貫行の主張者山下信義氏の著書などを讀んで居りますが自分の意志の弱い事をつく〴〵情けないと思ひます。新約を讀んでは自分はキリストに叱られた「ダビデ」青年の如く財と神とに仕へようとして居るのであらうと反省しても見ました。何とか自分は自己改造境遇改造をせねばならぬと焦燥の念に襲はれます。此著を讀みで一燈園に入れて頂いて敎へを受けたらと思ふ樣になつたのであります。

私には七十九になる老母があります、妻と四人の子供がありますが妻子は捨て得ますが母に心配さすが氣に掛りますけれど、怪我の全治次第家に歸り家の方一通りの整理を付けて園に參りたい考であります。何日でも入れて頂けませうか。長々と御邪魔して濟みません。何卒恐れ入りますけれど御返事を頂かして下さい、御願致ます。（天香氏宛）

○

（熊本）　平上惣吉

一面識もない私がこんな手紙を突然差上げまして恐縮致します。雜誌「光」であなたの御忙しい事は拜察致しますが、私はどうしても一度私の心の內を申上げまして、あなたを通じて光を拜し度く（私はまだ直接御光に御祈りする資格がありません）、次の樣な事を記しますどうぞ御許し下さいませ。私は過る日の日誌を再記して、貴著「懺悔の生活」を拜讀致しました時の感想を漏らしたいと思ひます。十二月一日。今年も早や一ヶ月。顧るに過ぎし十一ヶ月間、年頭に誓ひし事の何一つとして實行されしものなし、無爲無能の僕は如何にすべき。去月二十八日から自分は一燈園西田天香著の「懺悔の生活」を讀んだ。僕は只感激したと云ふより外に言葉を知らない。始めは少し仰山らしい所があると思つたが讀んで行く內に知らず〳〵引付けられる樣に感じた。僕は物質的には貧しい者である。何か心の樂しみを得たいと思ひ續けて來た。物質的に貧しくして心の樂みを得る。何と言ふ難しい希ひだらう。昔から聖人君子も容易に得られなかつたその樂しみを、何等據る可きなき僕が得ようとは。自分は惱み且つ悶えた。

「懺悔の生活」、それは新聞紙上で幾度も目に着いた文字だつた。僕は以前賀川豐彥著の「死線を越えて」を多大の期待を持つて讀んだが僕はどうしてもそれに共鳴することが出來なかつた。氏の救ひのあまりに理想的で、その心の美しく行爲の醇化して居るのが、遠き世界の出來事の樣に思はれて、自分等にはとうてい眞似の出來ない事を考へたのである。他人を愛し又救ふ心は自分を救ひ且つ愛する事だと思つては居るけれども、何にも判らない自分には始めからそんな事はとても出來ないと思はれた。その後會社の附屬俱樂部で「懺悔の生活」を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

讀んだ。自分は始めこの書を、前にも言つた樣に「死線を越えて」大同小異のものだらうと思つてこれに少しの期待をも持つて居なかつた。十頁讀んだ四分の一、四分の三讀んだ。これだ〳〵、僕が久しく求めて居たのは。何と言ふ謙讓な御心だらう、何といふ慈悲の御人だらう。僕は愛兒に手を突いて（知らず〳〵）あやまられた所に來た時、或る激しい心の改造が迫つて來るのを感じた。十月八日の日誌にも記した樣に、自分は主人である、家族を養つて居るのであると言ふ樣な心は僕は持たないつもりだ。一家は、一町は否世界は相互扶助だ、同じ人格の相互扶助だと思つた。

「懺悔の生活」は僕の心に改造を呼び起した。此改造が完成するか半途で挫折するか自分は知らない。けれども自分の今迄の所行を見るに半途挫折どころか十分の一も行けさうにない。噫自分はどうしてこんなに弱いのだらう、殘念だ。僕は僕の心に克つ事が出來ないのだらうか。彼も人だ、我も人だ、他人の出來る事が（物質的でなく精神的に）出來ない事はない筈である。他が十出來る事は其一つなりと出來はしないだらうか。其一つが出來れば他の九つも出來ない事はないだらう。

僕の生活にも今日から少しなりと違ふところが出來たのを喜びたい。午前九時起床、先づ試みに死の事を念頭に置きつゝ掃除に掛つたどうしたのか今日の掃除は少しも苦にならなかつた。今迄のは女達が仕事に追はれて心ならずもせずに居るのを怠けてしない位に考へて、自分がせんでも良いのをしてやるのだと思つて居た。けれども今日は死にさせて貰ふのだ、掃除が出來る樣な健康な身體を惠まれて有難いと思ふと自分はほんとうにさう思つて居るのだらうか、否々たゞさう思はうとして居るだけだ何だかしら尊い感がする。そして誰か目に見えぬ人が加勢でもして吳れる樣に、少しも疲れるとか厭やだとかいふ樣な氣持が起らない愉快に。掃除を濟まして母上と私と三人で晝飯を頂いた。父上と妻とユキノは今頃畑の隅で冷い御飯を喰べて居るだらう。四時に會社に出勤、會社に來ても何だか愉快な氣持がする。仕事をさせて貰ふのだと思へば、今迄少しの仕事も苦になつたのが、せずには居られぬ樣になる。

あゝ有難い死の御惠、自分は會社の附屬俱樂部を通じて「懺悔の生活」に、その本を通じて天香氏に、天香氏を通じて死に感謝の意を表したい。いや感謝の意はより良き祈りに依つて報いられるのだ。

私の十二月一日の日記は上記の通であります。日誌にも一寸ありますやうに私は漸く高等小學を卒へたばかり、家族は七人（養父母、妻、子供二人、雇女一人、私）で、家族がほんのさゝやかな農業を營み、私は當地窒素肥料會社に出勤し一晝夜を三交代して不規則亂雜な生活をして居るのであります。私は家庭の都合で長男であり乍ら二歲の時から叔母に引取られ、五歲の時叔母に連れられて只今の所に入家してそこの養子分になり、十六歲の時實父に死別し、其ために（生家が貧しかつたから）弟を一人引取り、その弟も叔母の至らざるなき慈愛の手に育てれましたが僅か一晝夜の病氣でなくなりましたので、叔母は悲歎のあまり暫らく發狂して其後身體次第に衰弱し、餘儀なく私は十九歲の時二つ年上の女と結婚せねばならぬことになつたであります。私はそれ迄戀を知らず、もとより自分の配遇者などに就いて考へる心はなかつたので御座いました。外の者に言はすれば、異性に對しては（何事に對してもであつたかも知れません）全くの子供でありまして、結婚の當時はすべて夢の樣で御座いました。その滿一年の日誌（大正八年七月三十日）の去年の今夜と」いふ條を讀みます度に、物足らず思つたり、又は反對に感謝したりする事があります。それは、その時結

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

婚して居なければ私は今より遥かに不純な者になつて居たことであらうと思ひまして。

先生私は童貞の儘（それがあたり前ではありますけれども）、處女にあらざる女と結婚したのであります。妻は不謹愼にも私の前で自分の娘時代の事を口に出す事があります（一寸うつかりしてらしくはありますが）。先生、そんな時の私の心中を御推察下さい。侮辱された樣な、又、嫉妬を交へた或る反抗的な心の起るのを、如何ともすることが出來ません（自分が童貞を守り居りしが故に）。けれども私は私の周圍の人々（會社での）を見ましたそして色々の事を聞かされました。妻が私の前で言ふ事に何の罪がありませう。彼は世間並の者であつたので御座いました。私は職友の話を始めは眞實とは受取りませんでした。そしてけがらはしいものとしてなる可くそんな會話のある所を避けましたが。二人寄れば女の話で御座います、私は次第に慣れましたそしてそれを事實として受入れることが出來る樣になりました。それには女工の無遠慮な態度も與つて力がありました樣で御座います。けれども私は妻の愛は感じて居ります、かれは善良な妻であり母であり又嫁であります。が或る會社での友人は「お前ばかりそんなに眞面目にして居たつて何になるか、若い時は二度と來ない、今やらればやろ時はないのだと囁いて誘惑します。私は今二十五歳で御座います、此二三年來どんなに迷ひましたでせう。自分の樣な者はまだ一人も聞かない、否大抵の男は多くの女に關係したのを誇る位だ。『馬鹿々々しい受身の女でさへあんなだ者、何に拵ふものか』と思つた事が幾度ありましたらう。然しその誘惑の手に引きずられて今一歩と言ふ時、私には幼い可愛い二人の子供が目に浮びます、その笑顏が見えます。私は子供のために救はれて來ました。けれども今尙ゝもすると、[illegible]かりが童貞の保持者だつた、現在も女としては妻より外には知らないのだ、がゝあの尻ばかりにくつ付いて居るのだと自分にも思ひ又無遠慮な職友から言はれたりすると、（それが一顧の價値だに無きものと知りつゝも）、又馬鹿々々しいと言ふ心が起り、えゝ儘よといふ氣にならうとすることもあるのです。この儘では私はどうしても惡魔に勝てさうにありません。（先生、私は久しい以前から何か大きな賴りになるものを得たかつたので御座います。私も小さい頃から養父母達から、御寺や神社の前は御じぎをして通られればならぬ位は敎へられて居りましたが、それも殆んど忘れ勝でありました。三ヶ月ばかり以前稔（私の長男で五歳）があぐらをかいて御飯を喰べて居ましたから、私は何氣なく『べんと（美しく）に坐つて食べなさい』と言ひました。稔は私を見ましたが、「父さんもべべ（キタナイ）かもれ』と言ひました。私はハツとしました。先生、私もあぐらをかいて居たので御座いました。私は其後人にも子供から行儀を敎へられた位に話してあまり氣にも止めずに居りましたが、丁度其頃貴著を拜見致しましたので、どうして感動せずに居られませうか。けれども先生私は熱し易い者でありますから冷え易くもあります。過去三年間元旦每に誓つて出來なかつた禁煙が、十二月八日から斷然出來ましたのも貴著の賜であります。翌九日から、神樣佛樣に御燈明を捧げて御祈りすることが出來る樣にもなりました。正しく坐ることももう二時間位は兎に角續けられる樣になりました。己を反省する心も十二月一日の日誌を記した頃よりは多くなつた樣に感ぜられます。掃除もまだ續いて居ります。雇女のする仕事を自分がしても苦にならぬ樣になりました。然し私は前申しました樣に冷え易う御座います。家族の無理解な態度を見聞致します

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

り、したくても出來なくなりましたから會頭がいら〳〵します。けれども思ひ直す事（これが懺悔すると言ふことでせうか）も以前よりか容易になりました。先生私の生活は今後どうなりませうこんなに苦しみ乍ら御祈りしても甲斐がありますでせうか、後には何事にも喜ぶ事が出來る樣になるものでせうか、私の如き者でも私はまだ家族の誰をもどうする事も出來ません、否私自身がまだ少しも改まつて居ないので御座います。「懺悔の生活」は前記致しました樣に始め四分の一位はあまり氣にも止めずに讀みましたので、一回の讀了では落着きませんでしたから、どうかして一冊自分で求めて今一度十分に拜讀し又友人にも讀んで貰はうと思ひまして、漸く町の本屋から一冊戴かせて貰つて讀んで居ります。先生冷え易い私を弱い私を御救ひ下さいませ。御護り下さいませ。御忙しいと御察し致し乍らこんな愚痴を御聞かせ申しまして濟みません。これも私の弱い心からで御座います。弱い私は、私があるために保たれて居る家庭を、こんな風に思ふのが既に間違つて居りますが、どうしても捨てゝ一人生きる事は出來ません。家庭ぐるみに救うてやると言て吳れられますけれども、どうしても父母達が聞入れて吳れられさうに御座いません。先生の御話は所々語つて聞かせましたがまだそこ迄は尋ねても見ません。私は出來る事ならこの儘改まりたいと思ひます。この儘では難かしいと御著書では拜見致しましたが出來れば出來るだけなりとなどと思つてゐます。あゝこんな妥協が惡いのだとあなたから敎はりつゝも。先生私は何か强い烈しい心の糧食を頂きたう御座います。どうぞ御許し下さいませ。三日掛つて書きました此の手紙、殊に漸く義務敎育を終へて職工をして居ります私で御座いますから誤字があつたり言ふ事が後先になつて居ましたり失禮に當る所も多く御座いませうけれども、どうぞ御許し下さいませ。末筆乍ら讀んであなた樣の[illegible]す。（天香氏宛）

〇　（東京）檜山千里

私は過る三日午後一時頃鹿ヶ谷へ御伺ひした檜山と申す學生であります。

昨年の十二月八日學校の音樂會がありましたが其歸途初めて貴著懺悔の生活を讀まして頂きました。そして非常にうれしく感じ思はず淚を流した次第であります。

御本はすぐよみ終りましたが、それからは色々の事が省みられて今迄とは少し違つた心持の世界にくらしてゐるやうな次第で、尙もつと〳〵この心持を明瞭にしたいと存じ、冬休みに關西を見學旁々旅行する折を好い機會と思つてお伺ひしましたが、恰度御不在でお面會出來ませんでした。

其折に私は反つてうれしい樣な氣がしました。其わけを申上ます。それは京都驛に降りてすぐ電車で人々に聞きながら岡崎公園の方に參り、段々鹿ヶ谷に近くなつて靜かな寂しい道を步いてゐますと急に自分が反省せられました。こんな汚いこんな醜い魂をもつた身體などうして先生の前に現すことが出來よう、考へても恥かしくてゐられないと云ふ樣な氣持になつて、一燈園が見えますとお伺ひしようかすまいかと獨り立停つて悶えました。

然しとう〳〵決心して、折柄庭を掃いていらつしやつた方に御尋ねしてお留守と聞いたときは「助かつた」と云ふやうな感じがしました。今歸京して考へれば何故僅かの時間御待ちすることが出來なかつた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

んだと自分の意志のよわいのを腑甲斐なく思ひます。

けれどもとに角あの御本をよまして頂きましたことは實にうれしいのです。それで先づ自分が改新する爲今年から一切腹を立てぬ主義を實行しようと決心しました。自分がわるいと何時でも思つてすぐ謝罪しようと決心しました。そのお蔭ですか、この頃はそれは〳〵いゝ氣持で一掃とまでは行かぬとも心持の不安と云ふ様なことが少くなりました、ずつと安心した生活に入つたやうです。

これに就いては厚く〳〵御禮を申あげたいと存じまして拙筆をかつた次第です。其うちにまた機會を作つて是非御伺ひしてよく御禮を申上げ尙いろ〳〵御指導を仰ぎたいと存じます。（天香氏宛）

京都一燈園だより

當番

天香様の園へ歸られたのは（九州行脚より）十二月十三日であつた　園は諸方からきて下さつた道友で溢れてゐた。小學校の教員である方々が、年末から正月の休暇へかけて、園の托鉢をして見たいとの申込をなさるその御手紙が、まことに澤山であつた。私も天香様も御返事が行屆かないのを心配でならぬほどであつた。何分園の建物は多くて三十人が適當であるのに、六七十人もおこしになつては、どうするわけにもまゐらぬ始末。御手紙のもやうで、已むを得ぬ方だけを承諾したほか大方は別の機會にお願ひをしたのである。

托鉢先きは年末は忙しい。皆さんが精一ぱいにはたらいて下さる。

下さる。實業家、教育家、宗教家、其他あらゆる人々が、それ〴〵一能一藝を以て立てば立派な人でありながら、なれぬ事をしにゆきなさる。學貧學愚の托鉢三昧、ありがたい事であります。

餅搗は三十日にした、壹石ほども搗いたことか。晦日の拂はこれだけの大勢でも多分六七十圓もあればよかつたことであらう。

例年の吉例として晦日の夜は十字街頭に往く。八十人の人が、それ〴〵の托鉢先きへとまりがけで托鉢にゆく。天香様藤淳様は杉本方へ。當番の私は家政女學校へと云ふ風に。晦日の夜の一燈園は一年中の一番少人數の日なのである。

「懺悔の生活」が出てから、大正十年の後半季は實に俄かに忙しくなつた。が、大體は無事で大病もなく（透石氏一人濟世病院にあるの外）金川のたみ子氏無事安産した外減ることはなかつた。

同人の目方は大抵は増加する。一兩人少々疲れたものあつた外、無事大正十年を送つたことである。

元旦は皆托鉢先きで雜煮を祝うてくる。正午頃からそれぞれ園にかへる園の祝餅は午後三時であつた。天香様はじめ一同禪堂にて靜坐讀經の後で話があつた。八十人の會食は園では空前である。一日二日三日は休み同様である。九州から信州から其他、國々から學校の休暇中にきて下さつた教育者の

あまり混雜で出來なんだ。しかし東京から中桐さんがきてくれられて四五回話しをしてくれられたことである。

七日八日頃には教育者の方々は歸られた。併し毎日十數名の訪問者と數名の一宿兩餐の方々は絶えなんだ。どなたがたれやらわからない。天香は同じことを幾度もその人に聞くのがつらいが、覺えられぬのだから仕方がないとあやまつて居られた。

天香樣は奇數の日は夕方から一燈園に歸り澤山な方々に一々托鉢の模樣をきゝ新らしき人にあひ、偶數の日の朝はお話しをする事にきめられた。そうしてその日の正午頃迄園に居られる。あとは衣ノ棚の托鉢先きにゆかれるのである。こんな事で正月はすぎてしまうた。あまり澤山な方々と、取込みとで何が何やら分らぬほどである。一體どうなるものかとおもはれる、けれども世の中はかはつた樣なきもちがする。

編輯者より

○編輯上の都合で**二月號**を**休刊**するの餘光ない仕誼に立到りましたので、**本號**は**三月號**として發行することになりました。深くお詫び申上げます。

○本號表紙の題宅は法然上人眞筆、選擇本願念佛集（京都、廬山寺所藏の國寶）中より頂きました。

謹告

事務整理の都合上、本雜誌の發送及び代金の收受等に關することは、一切左記にて取扱ふことに致しました。隨て是まで東京宣光社にて御預り申してをりましたものは皆、移渡しましたから、さやう御諒承下さいまし。

京都市柳馬場三條下ル　宣光社（振替口座大坂五九八三九番）

但し雜誌編輯の事は尙ほ暫く從來の通りに致して置きますから、編輯に關する御用はやはり、

東京牛込原町三の五三　東京宣光社

に宛てゝ御申越し下さいますやう御願ひいたします。

大正十一年三月十四日印刷　（代金二十錢）
大正十一年三月十五日發行　（郵送料不要）

東京市牛込區原町三丁目五十三番地
編輯兼發行者　中桐確太郎
東京市神田區仲猿樂町十七番地
中外印刷株式會社代表者
印刷者　渡邊市太郎
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
發行所　東京宣光社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

大正十年八月六日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大正十一年三月十[illegible]

泰西名論文集

杜翁記念文庫

全百五十巻ノ内

第十五十六篇

メレジコフスキー著
柳田泉譯

ピーターとアレキシス

全二巻・一冊貳圓五拾錢
送料一冊金四拾錢
四六版一冊四百八十頁

―最新刊―

▼有名なメレジコフスキの三部作中の終篇で邦譯は本書を以て嚆矢とする。藝術的結構から見て三部作中第一の傑作であると夏目漱石氏は言つてゐる。

▼著者の高邁な文明批評家的見地から英明の帝王ピータアと皇子アレキシスとを假り來つて基督と反基督、ヘブライズムとヘレニズムの對立を描いたものである。

（一）論文集　ショウペンハウエル著（再版）
（二）ハムレットとドンキホーテ　ツルゲエネフ著（再版）
（三）耶蘇の生涯　ルナン著（既刊）
（四）大自然と靈魂の對話　レオパルヂ著（既刊）
（五）人生の哲學　ウヰリアム・ゼームス著（既刊）
（六）靈魂帶　ストリンドベルヒ著（既刊）
（七）人生と草花　マーテルリンク著（既刊）
（八）信仰と未來　マッチニ著（既刊）
（九）十一月の枝　ホイットマン著（既刊）
（一〇）自然人の冥想　トロソ著（既刊）
（一一）隨感錄　パスカル著（既刊）
（一二）トルストイの生涯　ロマン・ローラン著（既刊）
（一三）ルネサンス　ペエタア著（既刊）
（一四）ヘレニズムとヘブライズム　マシウ・アーノルド著（既刊）
（一七）黎明期の思想家　ブランデス著（續刊）
（一八）ラオコーン　レッシング著（續刊）

發行所　東京市神田區表神保町一〇　春秋社　振替東京二四八六一　電話神田二一三八